

安秉禧先生の及ぼされた学問的，公的生活の影響

著者	徐 ？穆
雑誌名	韓国語学年報
号	15
ページ	211-255
発行年	2019-04
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00001620/

安秉禧 An Byeongheui アン・ビョンヒ先生の及ぼされた 学問的、公的生活の影響*

徐禎穆 Seo Jeongmog ソ・ジョンモク(西江 Seogang ソガン大学名誉教授)

1. 序言

筆者は大きく二つの側面で先生の恩を受けて生きて来た。第一は当然勉強に関する恩であり、すべての弟子が共通に受けることのできた恩である。この恩は国語文法研究の指南となってくださったこと、文献を綿密に読むことの重要性を頭の中に植え付けてくださったことに要約される。

第二に筆者は先生にまた別の性格の恩を受けた。それは冠岳 Gwanag*クァナクの学科長としての先生を助教として、そして初代国立国語研究院長でいらっしゃった先生を語文実態研究部長としてお仕えして受けた恩である。この恩は公的な事務処理、公的な生活の厳格さと言える。この恩は生活の基本に関する厳格さ、竹を割ったようにまっすぐな仕事の処理、烈火のごとくお怒りになってもきれいさっぱり怒りを収められる人柄、後輩や弟子たちの困難なことを理解して援助なさる慈愛深さ等として脳裏に残っている。しかしそれはそのように表現するだけでは充分でないある畏敬の境地のようなものだった。この境地を手本にしようと努力して生きてきたのが過去40年のわたくしの公的生活ではなかったかと言えるほどであるが、それは生まれついたもので努力すると言ってできるものではなかった。

*【訳者注】ソウル市の南にある冠岳山 Gwanagsan クァナクサンの麓にある現在のソウル大学のキャンパス。

筆者は1978年の1年間の冠岳の助教時代と1991年から1994年までの国立国語研究院の部長を兼職した4年間ちょうど軍の服務を再び行うような気分で過ごした。軍の服務の大部分を最前線部隊の状況室で勤務した筆者は軍靴を脱いで寝たことのない生活をした。常に緊張状態に暮らしたことをこう表現するのだが、その生活が公務員生活のこの5年の間も持続したのだった。

2. 学問的縁

筆者は1968年に入学した。その年に教養課程部が設置され、筆者と同期性は1年間孔陵洞 Gongreungdong コンヌンドン*・キャンパスで学んだ。安秉禧先生はその時国語科の科長を務めていらっしゃった。この68年という入学年度が筆

者には幸運の年度だった。その教養課程部の国語科の助教として李秉根 Yi Byeong'geun イ・ビョンゲン先生がいらっしゃった。1 学期「国語学概論」を心岳 Simag シマク**先生が教えられたが、最初の時間に李秉根先生が講義室に心岳先生をお連れした。この場面が筆者が国語学の世界とぶつかった最初の経験だった。神秘的だった。

*【訳者注】ソウル市北方の蘆原区 Noweon'gu ノウォングにある。

**【訳者注】李崇寧 Yi Sungnyeong イ・スンニョン先生のこと。心岳はその号。韓国では敬愛を込めて普通先生を号で呼ぶ。

1 学期の中頃、2 年生の時に国語学を専攻していた先輩たちが来て筆者を李秉根先生の研究室に挨拶に行った。その先輩の中には高校の先輩がいた。そこで国語学という学問の世界に入ることを決心した。漠然と高麗歌謡を勉強しようかと考えていて、家では行政試験を受けて公務員をせよという指針があったのだが、この時心は国語学のほうに固まっていた。あの神秘的な場面のためだった。そこで工科大学、文理科大学、法科大学、商科大学の 2000 名余りの学生の教養国語*を管掌する方が隣の部屋にいらっしゃる安秉禧先生だという話から先生のお名前をお聞きしたのである。

*【訳者注】工科大学、文理科大学、法科大学、商科大学はそれぞれ日本の工学部、文理学部、法学部、商学部にあたる。韓国では総合大学を「大学校」と呼ぶ。教養課程部（日本の教養部にあたる）の学生には「教養国語」の聴講が義務付けられる。

そして 2 年生になると東崇洞 Dongsungdong トンスンドン*に来て一石 Ilseog イルソク**先生、心岳先生にお会いできた。心岳先生はわれわれの学年の卒業とともに定年を迎えられた。心岳先生が最後の弟子たちのわたくしたちに注がれた愛情は厚いものだった。その時そのグループでまだ国語学界にいる人は朴良圭 Bag Yang'gyu パク・ヤンギョ先生とわたくしの 2 人である。李基文 Yi Gimun イ・ギムン先生が多くの科目を教えられた。3 年の間 5 科目を受講した。姜信沆 Gang Sinhang カン・シンハン先生、李承旭 Yi Seungug イ・スンウク先生も出講にお出でになり、4 年からは金完鎮 Gim Wangjin キム・ワンジン先生も赴任して来られた。姜信沆先生は 69 年 1 学期に「国語正書法」を教えられたのだが、2016 年夏その科目の中間試験、期末試験の筆者の答案とその複写を郵送してくださった。なんと 47 年前の答案である。それをいまだに保管してくださったのである。その内容を見て驚いた。中間試験の問題が「Kenneth L. Pike と Daniel Jones の表記法理論に照らして現行正書法について論ぜよ」だった。その当時正書法の主要条項、欠陥、補完の方法等々そのようなものが答案に皆入っていた。途方もない深みをもって学んだのである。ところで面白いのはそのような理論的に叙述する部分はよくできたのだが、期末試験の○×問

題で「일찍이 iljig'i:일찌기 iljjigi」*** (かつて), 「올바른 olhbareun:올바른 olbareun」**** (正しい) が間違っていた. 理論に強く, 実際に弱いのである. 卒業して軍の服務を終えた後 1975 年大学院に進学して安先生の講義を受けられるようになった. 大学院からは先生に直接学び始めたのである. その時期には多分こんなに多くの先生たちに学べる幸運を受けられる学年は稀ではなかったかと考えられる.

*【訳者注】ソウル市鍾路区 Jongrogu チョンノグにある. ここに京城帝国大学のキャンパスがあり, 現在の冠岳キャンパスに移る以前のソウル大学の主要な建物は東崇洞にあった. 現在は Maronie-Gongweon マロニエ公園.

**【訳者注】李熙昇 Yi Heuiseung イ・ヒスン先生の号.

***【訳者注】前者が正しい. 但し北朝鮮では後者が正しい.

****【訳者注】後者が正しい. 但し北朝鮮では前者が正しい.

筆者が安先生の学問から直接啓蒙されたこと何点かを要約してみよう. こう書いてみると, 筆者が書いたほとんどすべてのことが先生の論著から出発したということを知るのである. ところでこれはまさに用心深くあるべきことである. どこまでが先生のお考えで, どこからが筆者の考えということを明確にしなければならぬのに, それがまったく, みんな経験なさったであろうが, 難しいことなのである.

[1] 敬語法

安秉禧(1968a)で有情名詞には「-의 vi/의 ui」を用い, 無情名詞には「-ㅁ s」を用い, 尊称名詞にも「-ㅁ s」を用いるという規則が確立した. ところでその論文に(1)のように同一人物に「-ㅁ s」を用いたり, 「-의 ui」を用いたりする場合があるという指摘があった.

- (1)a. 王이 i 耶輸의 ui 쁘들 bduudur 누규리라 nugyurira ᄒ샤 hēsya(釋詳 六, 9b)
 a'. 目連이 i --- 耶輸ㅁ s 알픽 arp̄i 셔니 syəni(釋詳 六, 3a)
 b. 太子祇陀의 vi 東山(釋詳 六, 23b)
 b'. 祇陀太子ㅁ s 東山(釋詳 六, 26b)

ところでなぜなのかと思って調べてみた. 『釋譜詳節』をしばらくカード化するうち次のようなことを考えた. 「-ㅁ s」を用いた場合は話し手や文にある他の人物がその人よりも下位者であり, 「-의 ui」を用いた場合は話し手や文にあ

る他の人物がその人よりも上位者だった。すなわち話し手がその名詞が尊称名詞だと考えれば「-ㅁ s」を用い、自分あるいは比較される人物より低く、尊称名詞だと考えなければ「-의 ui」を用いるのである。

このことを金完鎮 Gim Wanjin キム・ワンジン先生の講義の時間に発表したのだが、先生は「こりゃ本当だ」とおっしゃった。そこで「安秉禧先生の1961年の論文で「-ㅁ seb-」の使用状況を説明する時そのような論旨を明らかにしたのですが、なぜ「-ㅁ s」にはその論旨を適用しなかったのでしょうか?」とお伺いした。先生のお答えは「そうだなあ、それは安先生に直接聞いて見なさい」だった。この時筆者の頭の中をかすったのは、「わたしたちはおかしな新しいことが一つ浮かべば、先輩たちに尋ねるのだが、わたしたちの先生がたはそうでないようだ」ということだった。このことをその後講壇に立って何度も感じた。

どこまでが先生の考えで、どこからが学生の考えか分からない段階がある。筆者は授業時間で思い出されるのは、限界を置かず想像でさっと言ってしまふのだが、それがその瞬間「あっ、このことを誰かが先に書いたら、わたしは書けないな?」ということになる。そこで誰であれ、先生がた、先輩たちが研究したテーマで論文を書くことがまったく難しいことになるのである。

それだけでなく私的な場でやり取りした言葉の中のアイディアで誰かが論文を書けばそれが誰の考えなのかわからなくなる。5年頃前に筆者が「慕竹旨郎歌」についてどの場もかまわずわめきまわったことがあるのだが、ある学位論文審査後の夕方食事の席でまた「国史学界では『三国遺事』を無視して孝昭王が6歳で即位して16歳で崩御したというが、事実は『三国遺事』の記録通りに16歳で即位し、26歳で崩御したが正しい」と騒いだら、任洪彬 Im Hongbin イム・ホンビン先生が「事実がそうならば論文で書くべきであって、人がみんな聞いているこういう場で騒ぐことではない」とおっしゃった。その時「しまった。これは学問する姿勢ではないな」と思い、論文でそれを明らかにし、なぜそうなるのかを追求し始めた。そのことが結局郷歌の新羅中代政治史に足止めを食らう羽目に陥らせることになった。

われわれの時代にはある問題についてある意見を誰が一番先に提示したかを明らかにすることが真に重要だと考えた。ところが最近はある学説を誰が一番先に言ったということが知りづらくなってしまった。新しい真理を先に求めて発表すること自体が尊重されなければならない。他人が似た調子であれ一度言ってしまうとその後が続いて新たに付け加えて発展させるのはたやすい。だからどんな学説であれその端緒を開いた方を尊重しなければならないのである。

(1)から国語敬語法使用の基本原理が導き出される。「[+尊称]と[-尊称]とい

う特徴の決定は話し手が行う。その特徴は体言に固有の特徴ではない。国語の敬語法は話用論的支配を受けるものであって距離を測る人の心理的問題であり、文法論の原理として立てられる現象ではない。このような原理が導き出される。その後筆者の敬語法関連の論文ではこの原理が一番重要な原理として前提となっている。「-(으)시 si-」を統合させるものか、統合させないものかという判定は純然と話し手が主体である体言に対して[+尊称]の特徴を付与するか付与しないかによって決定されるのである。「선생님이 온다 Seonsaengnimi onda 先生が来る」*：「선생님이 오신다 Seonsaengnimi osinda 先生がいらっしゃる」*をどちらかが間違っていると言えだめなのである。「유미나, 아버지 오셨느냐? Yumina, abeoji osyeossnunnya? ユミナ, お父さんいらっしゃった?」**と尋ねるお婆さんの言葉も自然に説明できる。

*【菅野注】日本語で生徒が廊下で普通「先生が来た、来た」という時に、朝鮮語では現在形で言う。朝鮮語では先生に対して尊敬形を用いるのがきまりとされる。

**【菅野注】この場合父親はお婆さんから見て下位にあるから、尊敬形を使わず、‘왔느냐? Wassnunnya 来た?’を使うのが通例である。

先生は1961年に「-습 seb-」について明確な論文をお書きになった。「-습 seb-」が「主体が客体より下位者である時、主体の客体に対する動作が謙譲でなければならないこと」を表す「(主体) 謙譲の形態素」という論旨だった。そして話し手が客体より下位者でなければならないということを強調していた。話し手が客体より下位者であり、客体を尊称体言として把握してはじめて主体が客体に対して謙譲の表現を話し手が使用するのである。それ故客体が尊称体言か、そうでないかということは話し手が決めることである。同じ客体に対して同じ主体の動作が行われる2つの文に「-습 seb-」が統合されもするし、統合されないこともある。話し手が異なるのである。話し手が客体より高い人ならば「-습 seb-」が入る。話し手が客体より低い人ならば「-습 seb-」が入らない。「-入 s」の場合も「-(으)시 si-」の場合も同じである。それ故「どの体言にももともと尊称の特徴が入っているのではない。王も王の父親が見れば下位者であり、夫婦の父親も話し手が夫婦の立場で判断するならば下位者であるしかない。」という原理が導き出される。そしてこの原理の出発点は安秉禧(1961)へと導くべきものである。国語の敬語法の論議はこのことを忘れてはならない。

これを援用すれば、その客体が聞き手と一致する者となるや否や、「-습 seb-」はまさに聞き手に対する話し手謙譲として機能の変化が起こり得るのである。これが筆者が終止形語尾の中の「-습 sub-」を説明する徐禎穆(1988, 1993)の方式である。とろろで事実この話し手謙譲説は現代国語の「-습 sub-」について任洪

彬(1976)先生が先に述べたものである。筆者は安先生の学説と任洪彬先生の学説の間に橋を架ける役割程度をしたのだと思う。(2)で「-ㅁ b/-ㅅ sub-」のある形とない形、そして「-다 da」が「-더 də」に、「-까 gga」が「-꺼 ggə」になる現象を見ることができる。これについての筆者の説明の方法は(3)の如くである。結局は先生のお考えから出たものである。

- (2)a. 하 ha-ㅁ b{-니 ni-, -디 di-}꺼 ggyeo, 하 ha{-니 ni-, -디 di-}이꺼 iggeo: 하 ha-ㅁ b{-니 ni-, -디 di-}꺼 ggyeo 参考: ㅎ he{-ㄴ ne 니 ni-, -더 də-}잇가/고 njsga/go [中世]
- b. 하 ha-ㅁ b{-니 ni-, -디 di-}더 deo, 하 ha{-니 ni-, -디 di-}이더 ideo: 하 ha-ㅁ b{-니 ni-, -디 di-}다 da 参考: ㅎ he{-ㄴ ne 니 ni-, -더 də-}이다 njida [中世]
- c. 近代国語では「-ㅅ sub-」の主体謙讓の機能は縮小し、話し手の機能が優勢となり、現代国語では話し手謙讓の機能だけが残った。方言によってこの「-ㅅ sub-」の話し手謙讓の機能を受け入れない方言があって「하니이꺼 hanii-ggyeo, 하니이더 haniideo 形」が存続している。そのような方式は「聞き手尊敬」の「-이 i-」を強く維持する。「-더 deo-」, 「-꺼 ggeo-」はこの聞き手尊敬の形態素「-이 i-」の後で /ㅏ a/ が /ㅓ eo/ に変わったものである。「-ㅅ sub-」の話し手謙讓の機能を受け入れた方言は聞き手尊敬の「-이 i-」を弱く維持している。「-ㅅ sub-」の話し手謙讓の機能も受け入れ, 「-이 i-」の力も強く維持している方言が「합니꺼 habniggeo, 합니더 habnideo」形を持つ。

安秉禧(1965b)の 15 世紀国語の丁寧法についての研究は(2)で見る現代国語の「합쇼 habsyo 体」の語尾についての形態素に基盤を置き、国語の聞き手の待遇の等級を説明しようとする筆者の研究の基礎となった。

[2] 疑問文

中世国語で「-고 go」, 「-뇨 nyo」, 「-료 ryo」などが説明疑問文に用いられ, 「-가 ga」, 「-녀 nyə」, 「-려 ryə」等が判定疑問文に用いられるという先生(1965)の論文はその後国語学界のもっとも模範的な論文として公認されていた。この問題は、李承旭 (1961)で通時的な事実、すなわち「-고 go」がより古形で, 「-가 ga」が後代形であると把握なさったのであり、心岳先生(1961)で敬語法上の違いがあるものと見たのである。ところで心岳先生は『中世国語文法』を教えられる時、

本の内容とは違って疑問詞があるかないかの問題だとおっしゃり、この問題を紹介なさった。その時筆者の学部2年生の時[1969年]であり、それを求めることが出来なかった。後に高永根 Go Yeong'geun コ・ヨングン先生が複写して作った教材を通じて接することとなった。その論文を読んで論文の体裁が気に入ってその後筆者が書いた文はほとんどみんなその論文の体裁を手本としようと思った。

この論文に見るならば、この事実を一番先に着目した方は羅鎮錫 Na Jinseog ナ・ジンソク先生だと言及されたものがある。しかし「-고 go」は疑問詞があれば用いられるは合っているが、「-가 ga」は疑問詞があってもなくても用いられると言ったのは充分ではないというのである。ところでそのお名前を見た瞬間「あ、あの方か?」と言って驚いた。筆者は幼かった時から羅鎮錫先生のお名前を聞いて知っていた。慶尚南道の初中等教育界の神話であらっしゃった。主に奨学官をなさったが、東萊 Dongrae トンネ*高普（東萊高等普通学校）出身であり、許雄 Heo Ung ホ・ウン先生の後輩であり、외솔 Oesol ウェソル先生のように「넴보라살 neomborasal 紫外線」, 「마름모꼴 mareummoggol 菱形」, 「사다리꼴 sadariggol 梯形」, 「나란히꼴 naranhiggol 平行四辺形」**というような教育用語の普及で先頭に立ったものと思う。安先生のその論文の注には現代西南慶尚南道方言にもこの現象があると指摘されている。これを受け継ぐのが崔明玉 Choe Myeongog チェ・ミョンオク先生の1976年の論文である。

*【菅野注】釜山市 Busansi ブサンシ東萊区 Dongraegu トンネグにある。

**【菅野注】외솔 Oesol ウェソルは崔鉉培 Choe Hyeonbae チェ・ヒョンベの号。彼は漢字語を純粹の朝鮮語に置き換える運動（日本のことば直しの運動にあたる）を起こした。

筆者はこの状態から出発して資料を当なん方言から持って来て、単文だけでなくいろいろの複合文で疑問詞と「-고 go」系疑問語尾の一致の現象がどのような実現を見せるのかを、生成統辞論の WH-移動を援用して整理した。この筆者の博士学位論文の論文を公刊した『국어 의문문 연구 (国語疑問文研究)』(1987)は勉強に際して筆者が先生から得た最も大きな恩である。ところでこの論議の核心の例文は(3a, b)である。

- (3)a. 「니는 순이가 놀로 좋아한다고 생각하노? Nineun Suniga nullo johahandago saeng'gaghano? おまえはスニが誰が好きだと思うか?」*
- b. 「니는 순이가 놀로 좋아하노고 아나? Nineun Suniga nullo johahaneungo ana? おまえはスニが誰が好きか知っているか?」*

* 【菅野注】標準語ではそれぞれ ‘너는 순이가 누구를 좋아한다고 생각하느냐? Neoneun Suniga nugureul johahandago saeng’gagha-neunya?’ , ‘너는 순이가 누구를 좋아하는지아니? Neoneun Suniga nugureul johahaneunji ani?’ .

筆者は(3a, b)を国語統辞論が世界の言語学界に向けて提示した最も重要な例文であると自負するのだが), Radford(1981) の本を翻訳する時, 弥阿里 Miari ミアリ*のあるチキンの店で任洪彬先生と一緒に WH-移動に関して論議しながら対応の英語の文を翻訳する時出てきたものを紙ナブキンに書いて来て発展させたものである. だからこのテーマにはお二人の考えが底に横たわっているのである.

* 【菅野注】ソウル江北区 Gangbug’gu カンブックにある.

否定の「아니 ani」を扱った先生(1959b)の論文は, 筆者が博士学位論文で繫辞構文とその否定文の統辞構造を確定した時期を準備してくれた. 「이 i-」の後に「-가 ga」と「-고 go」が用いられるのだが, これを動詞, 形容詞の後に用いられる「-니 ni-아 a」, 「-니 ni-오 o」と区分するためには繫辞「이 i-」の存在を設定せざるを得ず, また繫辞を設定するや否や同じく「-가 ga」と「-고 go」を統合させる「아니 ani アニ」のために「아니 ani 이 i-」の統合体を認めざるを得ないのである. 筆者はこれを博士学位論文通過の一つの難関となるだろうと見て心血を注いで書いた. ところが学位論文の審査過程で委員長だった先生が「何の問題もない」とおっしゃって無修正通過をさせてくださった. この時「-지 ji」が接続語尾「-디위 diwi/-디외 dioi/디웨 diwəi」に起源を持つと論議したのをご覧になって, それが「-द्यो에 dyoəi」と記された例が『三綱行実図』にあると直接原典を見せてくださり, 吏読では「豆亦」と書かれるとおっしゃり, 接続形語尾の半言形語尾化の過程を支えとしてくださった.

[3] 構造記述言語学の白眉

活用語幹に関する先生の硕士学位论文(1959a)ははるか後に文法研究史を書く時に詳しく読んだ. 26歳の時にお書きになった論文である. この論文はアメリカの記述言語学を理解してその精神にそっていわゆる不規則用言を中心に中世国語の用言の語幹交替の共時態を客観的に記述する記述言語学の模範を示したものである. その当時世界最高の水準と言っても言い過ぎではないであろう.

先に述べた 1965 年の疑問文研究にも語尾を形態素として分析する詳しい過程

が入った。このような論文として 15 世紀国語の活用に関しては文法形態素の記述言語学的分析は完成したと言える。

[4] 残念な諸点

先生の講義を受講して感じた最も大きく残念な点は、この論文を執筆する動機やアイデアを得、論旨を展開する過程の不十分さや残った問題についての進んだ論議の必要性等に関してお話になるのをお聞きすることができないという点だった。いや、ひょっとして先生の講義時間にこの論文に関して言及なさること自体を聞くことが出来なかったのかも知れない。多分ほとんど唯一お話になったのが 1982 年頃「謙譲法」について再論なさった論文について 1 度程度お話になったのがすべてのようである。それほど先生はご自分がなさった学問的業績について謙虚でいらっしゃったし、ご自分の学説で講義時間を過ごすことをためらわれた。大部分の講義内容は他の方がたの論文、まだ研究されていないテーマ、文法学の基本と言うべき形態分析、中世国語の材料を用いることで注意しなければならない厄介な言語現象であった。

しかし直接文法現象についてぶつかって新しい着想をしなければならないわたくしたちの立場としては実に残念なことだった。見方を変えれば、その諸論文の中にすでにみんなあらわれているのだが、わたくしたちが力不足で細心の注意力をもって読めないことから出て来る残念さなのであろう。

しかし内面的にもそれらの論文の完成度に深い信念を持っていたらっしゃった。先生はご自分の書いた論文には一つの文をも削ることも付け足すこともないというほどの自信をお持ちでいらっしゃったであろう。そして少なくとも 1960 年代まではそれほどに完成したお考えでなければ論文としてお書きにならなかったものと見られる。学問に対する先生の完璧に追求する態度を示す一例とし挙げることはできるのは「国語の文の現代化についての研究(1968)」という研究報告書である。1970 年代初に筆者は冠岳の中央図書館でこの報告書を見た。その時筆者は近代国語と現代国語の違いの生じた開化期の国語でなんらかの文の変化が生じたのだろうかということを心中に抱いていたが、結局このような研究には着手に至らなかった。文の変化を究明することは膨大な作業となるであろうし、開化期の文献はあまりにも多い。筆者はその研究報告書が完成して公刊されることを長い間待った。

1991 年夏ごろ国語研究院の仕事をなさる時、ある昼飯時に疑問文についてお話なさる時に「実はあの論文で強調したのは「-(으)ㄴ다 nda」が意図法疑問文

だということなのだが、それが十分に論証さず、その後大きく論点として浮かび上がらず残念だ」という意味のお話をなされた。筆者は合わせる顔がなく恥ずかしかった。WH-現象にだけ没頭して2人称主語の文に用いられる「-(으)ㄴ다 nda」の機能については深く考えることのできない状況だったのである。意図法「-오 o/우 u-」が心岳先生の永い間の思索のテーマだった点と1人称主語の許雄説との論争を考えれば、当然それが先生の主たる関心事だったのだが、その難しいテーマは依然としてわれわれがアプローチするにはあまりに遠い中世国語の秩序のようだ。

筆者が先生にお伺いしなければならなかったのにそうできないでいたことの一つはモダリティーの先語末語尾のことである。特に「-ㄷㄹ da-」と「-ㄴ ne-」,そして「-(으)ㄴ ni」と「-(으)ㄹ ri」についてある方向の解決策があるかと最後のテーマのようにしがみついている。筆者が「-ㄴ nu-」を「現在認識」「-ㄷㄹ da-」は「過去認識」と見、形容詞、繫辞の後ろには「ゼロ変異形」が来るものと記述した。「ㄹ iss-」,「ㄹ ass-」,「ㄹ gess-」の後ろでは平叙法では「ゼロ変異形」、疑問形では「-ㄴ nu-」が現れると簡明に記述した。先生がご覧になったらなんとおっしゃるかと気がかりである。

[5] 学んだことと教えたこと

筆者が教えたことの主内容は首都出版社の『国語学概説』と書先生の講義ノートである。この本の文法論を先生がお書きになった。ところでその内容が記述言語学を国語に応用したものとしてはその当時見ることのできた最高の水準だった。音韻論は金完鎮先生がお書きになったが、プラハ学派の理論が整理されていた。トルベツコイの音韻論的対立をそれほど正確に説明した文はその当時ではどこにもなかった。この内容を筆者は李基文先生の講義時間に筆記しながら学んだ。ところが筆者がデモにくっついてまわったものだからあまりに多く授業を抜け、ノートが充実していない。空白があまりに多かった。

1976年頃朴良圭先生が永生 Yeongsang ヨンセン大学の専任に赴任し、この本を教材として用いているのを見た。筆者は79年に江原 Gangweon カンウォン大学に赴任して最初の学期で「言語学概論」を担当した。その本と、安先生の文法論の講義を聞いた Gim Changsob キム(金)・チャンソプ教授のノートのコピー本と、金完鎮、李秉根先生共著の『高校文法(Bagyeongsa パギョンサ)』と、筆者が持っている李基文先生の講義ノートを混ぜて教案を作った。このような教案によって「言語学概論」、その年の夏の1級正教師研修『国語文法論』、その後

『国語学概論』、『国語文法論』等を教えた。本当に八方美人のノートだった。

初めこうして始めた教案が、その後変形生成文法を若干加味すること等で少しずつ補完していき、生涯続けていった。そして結局赤い本、黒い本で公刊されるまで行った。その後で西江 Seogang ソガン大学では「国語文法論」が「国語形態論」と「国語の文の構造」に分かれた。筆者は先生に学んだことをそのまま教えたことになる。筆者が付け加えたのは変形生成文法だけだった。その教案がこの苦海を押し分けて行くのに疲れ果てた身を支えてくれる生涯の支えとなったのである。

3. 文献を綿密に読むことの重要性

文献を読むことについてわれわれの世代に安先生ほど大きな教訓を下された方はほかにいないだろう。安秉禧(1987)で郷札表記に用いられた漢字の音と訓を検討し、誤植の文字と誤読の文字を指摘なさったこと等は原文校勘の模範を示してくれたのである。そのほかにも中世ハングル資料についての正誤の判断も多くある。

この校勘で提起された最も重要な一つ概念が「内的再構」である。郷歌の原文の正誤を郷歌の解説の中で根拠を求め判断するというものである。ところでこのようなことは予想外に領域が広くてすべきことが山積している。筆者はこの概念を広げて、『三国史記』、『三国遺事』の内容を正確に読解するにも適用している。いろいろの文献の中で証拠を求め、誤ったものを直し、正しい解釈をするのである。最近筆者がしたもの何点かを紹介する。ここでは「文献を正確に読まなければならない」という先生の教えが大きな影響を及ぼしている。計寸(寸[親等]を朝鮮式に計ること)能力は「言語礼節」を作る時先生が身につけさせてくださったものである。

[1] 郷歌表記の誤謬

筆者は永い間郷歌を教える際に「讃耆婆郎歌」の第4句「沙是八陵隱汀理也中 [몰개 가른 물시보리에 molgai garen mursiβuriyœi]」と第5句「耆郎矣兒史是史藪耶 [耆郎의 즈시웁시 수피여耆郎 vi juziolʔsi supiyə]」が順序が入れ替わって記されていると言ってきた。その理由は2つある。第1に「몰개 가른 물시보리에 molgai garen mursiβuriyœi」は五葉松の林があり得ない。第2に「몰개 가른 물시보리에 ¹⁾molgai garen mursiβuriyœi」には第6句の「逸鳥川理磧惡希 [수문

나랏²⁾ 지백아히 sumun naris jeibŷag'ahŷi」のようなイメージを持って「기랑(耆郎)giran」が置かれていた政治的苦境を意味する言葉にならないといけない。

ところで2014年にこの内容を論文として作成する際に、いつかどこでか先生が『三国遺事』に誤植があるということをおっしゃり、「祭亡妹歌」の「吾隱去内如辭叱都[나는 가나닷 말도 nanun ganēdas maldō]」で「辭」と「叱」が順序が入れ替わって記されたということとともに「讚耆婆郎歌」の2つの句が順序が入れ替わって記されたということを指摘なさったことが思い出された。すぐさま李賢熙 Yi Hyeonheui イ・ヒョンヒ教授に電話して問い合わせたら、探し出して知らせるという言った李教授は10分余り後に「国語史資料としての『三国遺事』」という論文の中にあると話してくれた。

その論文には「10句体の郷歌は4句-4句-2句でもって段落が作られるのが一般的である。しかし処格語で終わる第4句が段落が分かれる4句の位置に来てはならない。文が終わる第5句が4句の位置に来なければならない。それ故現在伝えるこの歌は元来歌から第4句と第5句が転倒して記されたものである」という内容が入っていた。郷歌の形式と文法的情報としても2つの句が入れ替わって記されたということを論証したのである。その論文の中にはこの2つの句が入れ替わって記されたということが一番最初に指摘した方は金俊榮 Gim Junyeong キム(金)・ジュニョン先生だということも正確に記録されている。このように知らず知らず筆者の記憶の中には先生から講義時間に学んだり教室の外の閑談で行き来した情報が積もっていることを告白しないわけにはいかない。

学問の論議は果てしないものやら、正しいことはどんな場合でも正しいことを示してくれるものやら、この間の夏に金星奎 Seong'gyu キム・ソングユ教授が新しい論文の原稿を1篇送ってきた。郷歌の形式を論議したものだが、「後句」、「落句」が現代の「後斂」に該当するというものだった。予定通りなら『国語国文学』誌に載りそうなのだが、その論文では「慕竹旨郎歌」、「怨歌」、「慧星歌」、「処容歌」を4句-2句、4句-2句の2聯から成るものと再構成してある。筆者は「後句」についての論議の中でこれがもっとも適合していると判断する。従って今郷歌の形式は現行の2つの句が1行を成すと見れば「本歌辞2行-後斂1行」から成る2つの聯の基本の枠を持つこととなる。終章が同じ時調の2首のように見えるようになる。勿論「慕竹旨郎歌」、「処容歌」は8句ではなく10句から成る歌だというのが前提となる。「慕竹旨郎歌」の初めの部分の14字が入るべき空白を見れば誰もが10句体だということを知り得る。

この新しい学説が成立するためには当然「讚耆婆郎歌」のこの第4句と第5句は位置を入れ替えなければならない。「讚耆婆郎歌」は小倉進平(1929)、金完鎮

(1980)先生の解説では「5句-3句-2句」と分かれ、梁柱東(1929/1980)先生の解説では「3句-5句-2句」と分かれる奇形的な姿を持っている。この2つの行を入れ替えて行の調節を反映して「讃耆婆郎歌」を再構成すれば(4)のような姿を持つこととなる。解説は金完鎮(1980)先生の解説に従うが、なん箇所かはほかの方々の意見を反映させた。

(4) 늦겨곰 벼룩매

nus-gyø-gom bæ-rø-mai

헐 구름 조조 뜨간 언저레

hœn gu-rum jo-co bdur-gan ən-jø-røi

아아 자식가지 노포

a-a ja-sis-ga-ji no-po

물개 가른 물시브리에

mor-gai ga-ræn muur-si-βur-ri-yøi

郎이여 디니더산

—iyø di-ni-dø-syan

아아 자식가지 노포

a-a ja-sis-ga-ji no-po

이슬 불긴 드라리

i-suur bæ-rin dæ-ra-ri

耆郎이즈시울시 수피여

—ei juu-zi-or?-si su-pi-yø

누니 모들 지즈름 花判이여

nu-ni mo-dø-r ji-juu-ror? —i-yø

수문 나릿 지벽아히

su-mun na-ris jei-βyæg-a-hœi

마슴마 마술 좇느오라

mæ-zø-mœi gæ-zø-r joc-nø-o-ra

누니 모들 지즈름 花判이여

nu-ni mo-dø-r ji-juu-ror? —i-yø

(4)の解説で「花判」は漢字語と見、意味上では花郎道の業務を管掌した風月主あるいは兵部令の別名であると推定する。「-判」が官等の名称に用いられた3等官の名称「蘇判[蘇塗を管掌した官職から来た官等]」を参考としたものである³⁾。

「讃耆婆郎歌」は681年8月の「金欽突の乱」に連座して無念だったかもしれない死に方をした文武王の上大等兼兵部令金軍官[金欽突の姻戚]の志操を讃えた詩である(徐禎穆(2014b)参照)。「耆郎」は60代の「老花郎」という意味である、「耆婆郎」は慶徳王が「耆郎」を見下げて「年老いた花郎」と称した言葉と見られる。「좇느오라 joc-nø-o-ra」は「逐内良齊」を解説したものである。

[2] 国と新羅

『三国史記』巻第6文武王代は(5a)のように始まる。姉の宝姫が妹の文姫に絹のチマで夢を売った「売夢説話」である。この説話の中の「國內」をどこを指すものなのか? そして『三国遺史』巻3「塔像第4」「溟州五臺山寶叱徒 Bosnae

太子傳記」の(5b)には「歸國」がある。どの国に帰って行ったというのだろうか？
外国から本国に來たというのだろうか？

- (5) a. 其妹夢登西兄山頂坐旋流徧國內[その姉が夢に西兄山の頂に登り座って小便をしたが、「國內(?)」に流れてあふれた]. 覺與季言夢[目覺めて末っ子に夢を話してやった]. <『三国史記』卷6「新羅本紀第6」「文武王上」>
b. 陪孝明太子歸國即位[孝明太子につき従って「國(?)」に來て]即位なされた.
<『三国遺事』卷3「塔像第4」「溟州五臺山寶叱徒 Bosnae 太子傳記」>

っこで「國」は何の意味であろうか？「nara(くに)[國]」は元來中国で宮、城、廓を含む地域で、王宮を中心としてその周辺地域を指す単語である。その外は郊であり、郊の外は野である。「國」字自体が都邑、首都という意味を持つ。

(5a)の「國」もこのゆな観点からアプローチしなければならない。「國內」は「nara an(国の内)」ではあるが、それは意味上では「全体の国の内」ではなく「首都の内」、即ち「徐羅伐 seorabeol ソラボルの内」を意味する。いくら夢でも、「小便が新羅の国の内」をあまねく満たしようもないのである。(5b)の「國」も「ソウル(首都)、徐羅伐ソラボル(慶州 Gyeongju キョンジュ)」と翻訳するか、「nara」と翻訳するならば「ソウル」を意味すると註を付けなければならない。孝明太子は 693 年頃 8 月五臺山に入り、修道して 702 年 7 月以後のある日ソラボルに來て第 33 代聖徳王となった。それ故(5b)の「歸國」は今日のように外国にいて「国に帰ってくることを意味しない。この「歸國」は都邑である「ソラボルに帰って」の意味である。重要なのは「nara 國」が都邑、ここではソラボルを指す事実である。⁴⁾

(6)に出て來る「新羅」はどこを指すのだろうか？(6a)の「在新羅(新羅にいて)」王の争奪戦が起ったというのだが、その「新羅」はどこだろうか？(6b)の「至新羅」は光が「五臺山」から「新羅」に至ったそうだから、五臺山は新羅の地ではないのか？

- (6) a. 淨神太子(與)弟副君在新羅争位誅滅[淨神の太子が弟の副君と「新羅(?)」で王位を争い死亡した]. (「與」字が欠落していることは(7a)を見れば分かる).
b. 國人遣將軍四人 到五臺山孝明太子前呼萬歳 即時有五色雲自五臺至新羅七日七夜浮光[國人が將軍四人を遣わし五臺山に到って孝明太子の前で萬歳を叫ぶとすぐに五色の雲が五臺山から「新羅(?)」に至るまで7日の夜

昼輝いた]. <『三国遺事』卷3「塔像第4」 「溟州五臺山寶叱徒Bosnae太子傳記」 >

この「新羅」は国名「Sinra シルラ」ではない。それは「徐羅伐, 徐伐, 東京」のように「*sai-bər > syə-βur > 서울 səu* ソウル」を漢字を用いて記したものである。ここで「*sai* セ」は「東」を意味する。「*새 바람 saesbaram* セッパラム[東風]」に残っている。方向を表すわが固有語が「*남새 바람 nobsaebaram* ノブセバラム[東西風]」, 「*마파람 maparam* マパラム[南風]」, 「*하늬 바람 haneuibaram* ハニバラム[東北風]」等のように風の方向を表す固有語に入っているのである。

「*벌 bər*[野]」は「*벌판 bəlpan* ポルパン(平野)」を意味する。この「*동쪽 벌판 dongjjog bəlpan* トンチョク・ポルパン(平野)」を表す「*sai-bər*」から「*syə-βur*」が出て来、その言葉が「*서울 səul* ソウル」になった。「*sai* 新」, 「*벌 bər* 羅」は「*sai-bər*」を漢字の訓を利用して記したものである。「徐伐」は「*sai-bər*」を漢字の音を利用して記したものである。「徐羅伐」は「*sai-bər-bər*」に、「得烏谷, 得烏失[*실오실 sir-o-sir*]」のように、「音読字+訓読字+音読字」で「*bər*」をもう一度記したものである。「東京」は「*sai* 東」, 「*syə-βur* 京」で「*서울 səul* ソウル」を記したものである。それ故「徐羅伐, 徐伐, 東京」はすべて「*sai-bər > syə-βur > 서울 səul* ソウル」というわが固有語を記したもので、慶州地域を指す。元来は都邑を指した言葉が後世国名として用いられたのが「新羅 Sinra」である。それ故この文の「新羅」は「*서울 səul*」か「*sə-ra-bər*[慶州]」と翻訳しなければならない。

ところで一然 Ilyeon 禅師が(6a,b)を前に置いてみる際に、再び書いた(7a,b)の該当する位置には「在新羅」, 「至新羅」がない。(5b)を見て書き写した(7c)の「歸」の後にも「國」がない。なぜこうなのだろうか?

- (7)a. 淨神王(太子)之弟與王爭位 [淨神王の弟が王と王位を争った]. (「太子」が欠落したことは(2a)を見ればわかる.)
- b. 國人廢之 遣將軍四人到山迎之 先到孝明庵前呼萬歲 時有五色雲 七日垂覆 [國人が(淨神王の太子の弟を近くで) 廢位して將軍4人を遣わして山に到り、迎えた。まず孝明庵の前で萬歲を叫ぶと、この時五色の雲が七日間垂れこめた]
- c. 國人尋雲而畢至 排列鹵簿 將邀兩太子而歸 寶川哭泣以辭 乃奉孝明歸即位 [國人が雲を尋ねて至り、鹵簿を並べて二人の太子に会って行こうとしたが、寶川は泣いて辞し、ここに孝明を奉じて帰ってきて即位した.] <『三國遺事』 卷第3「塔像第4」 「臺山五萬眞身」 >

(5b)と(6)の最初の本が記録された時期の話し手たちには「sei-bər」を「新羅」や「國」で表現する意識があるのである。それは拡大すれば「溟州五臺山寶叱徒 Bosnai 太子傳記」が最初に作成された時期には「新羅」は訓読されて「sei-bər」で読み、「國」は訓読して「나라 na-rah」と読むのだが、意味は「sei-bər[首都]」を意味したということになる。

しかし一然禪師が「臺山五萬眞身」を再構成した時代にはそれ以上「新羅」が「sei-bər」を意味し、「國[나라 na-rah]」が「sei-bər[首都]」を意味するという意識がなくなったのである。(7a,b)に「sei-bər」を意味する「新羅」と(7c)に「서울 sŏul」を意味する「國」が用いられなかったのは高麗時代にはすでに「新羅」が国号として固まっていた、「國」が「国全体」を意味するものに替わったことを見せてくれるのである。国語学のこのようなことを知らせて初めて歴史がきちんと研究されることになる。

[3] 聖徳王の即位過程

この記録についてのその間の研究を検討してみると、文献を綿密に読むことがどれほど重要かがよく分かる。この「溟州五臺山寶叱徒 Bosnae 太子傳記」と「臺山五萬眞身」が見せてくれる「聖徳王の即位過程」をめぐる時期の新羅中代政治状況は正確に把握されないでいる。これは現代の韓国の学会が『三国遺事』、『三国史記』等を十分に読み解く能力を備えることができないでいるために生じたことである。

この時期に創作された郷歌の歴史的背景を明らかにすることは、国語学と国文学が協同して遂行しなければならない固有の任務である。そしてその研究は文献を綿密に読むことから出発しなければならない。そしてその研究は文献を綿密に読むことから出発しなければならない。これが文献を読むことに責任を持たなければならない国語学が当面するもっとも大きな問題である。

<1> 「國人が廢して」の目的語は何か？

(6a)には「弟である副君」と王家を争って誅滅した[死亡した]王[淨神の太子、孝昭王]がおり、(7b)ではその「淨神王の弟」が「王と王位を争い」「國人が廢し」がある。誰かが地位から廢位されたのである。ところでその文の主語は「國人」である。國人は誰なのだろうか？ 複数である可能性もある。文武王の兄弟姉妹

たちも見える．その核心は瑤石公主である．これを「国の人々」と翻訳すれば誤解が生ずる．國人は国の実勢，国の主人という注釈が必要である．

「國人が廢して」には目的語がない．ところでその前に「淨神王の弟が王と王位を争った」がある．こうなると，後行の文の目的語は先行の文の主語となる．それ故「廢する」の目的語は「淨神王の弟」である．(7a)の「淨神王の弟」は(6a)の「淨神の太子の弟」と関連付けて突き詰めれば「淨神王の(太子の)弟」から「太子」が欠落したものである．それ故「淨神王の太子[孝昭王]」の弟が廢位となったのである．それは誰か？ それは孝昭王の弟で副君に冊封された人物である．それは度の地位から廢位となったのだろうか？ 副君の地位から廢位となったのである．

『三国遺事』の翻訳書の新羅中代政治史研究の論著の中でこのように翻訳したものはただの1篇もない．ほとんどすべて「王を[廢し，追い出し]」と翻訳するか，目的語を明らかにしていない．孝昭王は死亡したのであって，廢位となったのではない．それ故廢位となった孝昭王の弟の副君を明らかにすることが非常に重要なこととなる．

<2> この王位争奪戦はどのような事件か？

孝昭王の時の謀反事件は一つしかない．700年の「慶永の謀反」がそれである．(6)，(7)の王位争奪戦は(8)の「慶永の謀反」を指すのである．「慕竹旨郎歌」はこの頃の多分老いて死亡した竹旨將軍の初喪（喪中）の時か大祥（3回忌）の時に作られた輓歌であると見られる．

- (8)a. 700年[孝昭王9年] --- 夏五月伊飡慶永*{永は玄とも記す}* 謀叛 伏誅[夏五月伊飡慶永*{永一作玄}* 謀叛 伏誅]．中侍の順元が緣坐し罷免された[中侍順元緣坐罷免]．
- b. 702年[同11年] 7月に王が昇遐した[十一年 秋七月 王薨]．諡号を孝昭といい，望德寺の東に葬った[諡曰孝昭 葬于望德寺東]．<『三国史記』 卷第8「新羅本紀 第8」「孝昭王」>

この謀反の性格は何であろうか？ この反乱2年後に孝昭王が昇遐した．ところでより重要なことは「皇福寺石塔金銅舍利函記」によれば神穆王后が700年6月1日に死亡したという事実である．弟が兄の王位を見下げた事件であるが，その事件で母親が死んだのである．なぜこのようなことが生じたのだろうか？ そ

れは神文王の王子たちを見ないと分らない。

- (9)a. 687年[神文王7年] 2月 元子が生まれた [元子生]. この日鬱陶しい天気で暗く、大きな稲妻と雷があった [是日陰沈昧暗 大電雷].
- b. 691年[神文王11年]春3月1日 王子理洪を冊封して太子とした[春三月一日 封王子理洪爲太子]. 13日大赦があった[十三日 大赦]. <『三国史記』 卷第8 「新羅本紀 第8」 「神文王」>

韓国史学界は(9a)の「元子」と(9b)の「王子理洪」が同一であると錯覚して、孝昭王を687年2月生まれと記された神文王の「元子」と誤解している。⁵⁾ そうして(10a)のように孝昭王が6歳で即位したと主張する。

しかし元子と王子は異なる言葉である。「元子」と「王子理洪」は同じ人物ではない。『三国遺事』は(10b)のように孝昭王が16歳で即位したとはっきりと明らかにしているのである。

- (10)a. 孝昭王は691年3月1日5歳で太子に冊封され、692年6歳で即位し、702年 16歳で昇遐した。聖徳王は681年に22歳だったなら、孝昭王の異母兄であり(신종원(1987)), 孝昭王の弟ならば691年頃生まれて即位しただろう(이기동(1998)).
- b. 按孝昭*{一作昭}* 以天授三年壬辰即位時 年十六 長安二年壬寅崩 壽二十六 聖徳以是年即位 年二十二[考えるに孝昭*{照は昭とも書く}*は天授3年壬辰[692年]即位の時に歳が16歳であり、長安2年壬寅 [702年] 崩御したが、齡26歳であった。聖徳がこの年に即位したが、齡22歳だった]. <『三国遺事』 卷 第3「塔像第4」「臺山五萬眞身」>

ところで彼らの父母である神文王と神穆王后(11)で見るように、683年5月7日婚姻した。これが事実ならば、あの2人の王の出生の時期はどのようなになったのだろうか？

- (11) 683年[神文王3年]春2月順知を中侍とした[以順知爲中侍]. 一吉漁金欽運の娘を納めて夫人となすこととし[納一吉漁金欽運少⁶⁾女爲夫人] --- 5月7日伊漁文穎、愷元を遣わしてその宅⁷⁾に到って冊立して夫人となし、その日卯の時に[五月七日 遣伊漁文穎愷元 抵其宅 冊爲夫人 其日卯時] --- 王宮の北門に到り、車から下りて宮中に入った[至王宮北門 下車入内]. <『三国史

記』卷 第8「新羅本紀 第8」「神文王」>

孝昭王が692年に16歳ならば、彼は677年に生まれていなければならない。聖徳王が702年に22歳ならば、彼は681年に生まれていなければならない。ところで彼らの母親の神穆王后は彼らの父親の神文王と683年5月に結婚したというのである。これをどのように解釈すべきか？ あまりにも分かり切ったことである。彼らは父母の婚姻以前に生まれたのである。それ故677年生まれ最初の孝昭王、679年(?)生まれの2番目の寶叱徒Bosnae、681年生まれ3番目の聖徳王は婚前の子息たちである。

そして神文王と神穆王后の正式の婚姻後に684年生まれ4番目の金嗣宗(『三国史記』卷 第8「聖徳王」27年[728年]「王弟」参照)、687年2月生ま5番目の金欽質(『三国史記』卷 第8「聖徳王」25年[726年]「王弟」参照)が生まれる。婚姻後生まれた元子は金嗣宗であり、金欽質は嗣宗の弟である。

(6a)は孝昭王の時に王の弟が副君に冊封されていたことを意味する。副君を置くことは孝昭王が子息なしに事故に遭えば副君が王位を継ぐという意味である。このようになるのは、691年3月神文王が太子を冊封する時最初15歳の子息「王子理洪」を推す勢力と4番目の8歳の子息「元子嗣宗」を推す勢力が対立したことを意味する。婚外子孝昭王が元子でなく、正統性がないので、婚姻後出生した元子嗣宗を太子としなければならないという勢力があった。

王子理洪を推す勢力が勝ち、「元子」ならぬ「王子」理洪が太子になった。(9b)の「王子」は「元子」でないという意味が入っている。文献はこのように綿密に読まなければならないのである。このようなことを外すと、真実を把握できないのである。そして692年7月16歳の孝昭王が即位して9歳の元子嗣宗を副君とし、相手と妥協した。4番目である元子嗣宗が副君となり、東宮を占有した。今や2番目の寶叱徒Bosnaeと3番目の孝明は立つ瀬がない。彼らは693年8月五臺山に隠れたことが(6)、(7)のまさに前の記録である。693年に寶叱徒Bosnaeは15歳(?)、孝明は13歳である。

副君に冊封された元子嗣宗が太子[孝昭王]の王位に挑戦したのが(8)の700年5月の「慶永の謀反」である。「慶永の謀反」によって神穆王后が死亡したのを見れば、孝昭王を推す勢力は神穆王后とその母親瑤石公主だったであろう。この謀反の後嗣宗の姻戚だったであろう慶永が刑罰を受けて死に、中侍金順元が縁故者の連座により罷免された。この金順元は慈儀王后の弟である。慈儀王后の実家を押さえるほどの力を持った勢力がこの謀反を鎮圧したのである。そうならば慈儀王后の実家の勢力は元子嗣宗を推したであろう。684年生まれ嗣宗は700年に17歳である。婚姻していたであろう。

慶永と順元はなぜ謀反を起こしたのだろうか？ それは神文王の嫡子の系統の元子の副君嗣宗が即位する希望を失ったためである。どんな場合に嗣宗が王となる希望を失うことになるのか？ それは孝昭王の子息が生まれることだけである。ところで孝昭王が子息が生まれたような情報がある。(12a, c)には王子金守忠と成貞王后がいる。どの王の王子なのか、誰の王妃なのか分からない。⁸⁾

- (12)a. 714年[聖徳王13年]2月—王子金守忠を唐に遣わし宿衛させたが、玄宗は邸宅と衣服を与え、これを寵愛し、朝堂で大宴を賜った[遣王子金守忠 入唐宿衛 玄宗賜宅及帛以寵之 賜宴于朝堂].
- b. 715年[同14年] 12月 —王子重慶を冊封し、太子とした[十二月—封王子重慶爲太子].
- c. 716年[同15年] 3月 —成貞*{他では嚴貞と言った}*王后を追放したが、絹500匹と畑200結と租1萬石、住宅1区域を賜った[三月 — 出成貞*{一云嚴貞}* 王后 賜彩五百匹 田二百結 租一萬石 宅一區]. 住宅は康申公の旧居を買って賜った[宅買康申公舊居賜之].
- d. 717年[同16年] 6月太子重慶が死に、諡号を孝殤太子とした[六月太子重慶卒 諡曰孝殤].—冬9月に唐に入った大監守忠が帰って来て文宣王、十哲、72弟子の圖像を獻呈し、すなわち太学に置く[秋九月 入唐大監守忠廻 獻文宣王十哲七十二弟子圖 卽置於太學]. <『三国史記』卷 第8「新羅本紀 第8」「聖徳王」>

(12a)で金守忠は714年に唐に宿衛に行った。唐の玄宗の待遇が手厚かった。何歳の時に行ったのだろうか？ もしも守忠を(13a)で見る704年に婚姻した王妃が生んだならば、多くても10歳である。そうならば彼は聖徳王の元子にならなければならない。しかしどこにも守忠を聖徳王の元子とは記していない。聖徳王の元子は記録がない。そして聖徳王の最初の太子は重慶である。かさなる慶事という名前から見て重慶は2番目の子息である。長子の元子[元慶(?)]が早く亡くなったのである。重慶は早くてせいぜい707年生まれである。守忠が704年聖徳王と婚姻した王妃の子息ならば、709年以後の出生である。714年に6歳である。6歳の子供が唐の皇帝の近衛部隊の兵士となって宿衛することは出来ない。大監という官職も子供が持てる職ではない。守忠は絶対に704年婚姻した王妃の実の子息ではない。従って聖徳王の実の子息である。

記録から見れば、守忠が聖徳王の太子重慶より年齢が多いことと見える。そうならば守忠は聖徳王よりもっと前の王の子息である。聖徳王の前の王は32代の孝昭王である。守忠は孝昭王の王子である可能性が大きい。今孝昭王が何歳で即

位し、何歳で昇遐したかが再び問題となる。「孝昭王が6歳で即位し、16歳で昇遐し、婚姻もせず、子息もない」という現代韓国史学界の通説のもとには誰も守忠が孝昭王の子息だと考えることができない。『三国史記』を読み間違え、『三国遺事』を信じない結果である。しかし徐禎穆(2013)のように「孝昭王が16歳で即位し、26歳で昇遐した」は『三国遺事』の記録を信じて受け入れれば、孝昭王は婚姻もし、子息も娘も生まれたとすることができるのである。

守忠が孝昭王の子息ならば、それを生んだ王妃がいなければならない。神穆王后以後初めて登場する王妃は704年に聖徳王と「婚姻した王妃である。ところで守忠はその王妃が婚姻する前に生まれたのである。その王妃は守忠を生むことはできない。

その次に登場する王妃が成貞王后である。ところで成貞王后は重慶が太子に冊封された715年12月から3箇月過ぎた716年3月に追放された。成貞王后が704年婚姻した王妃ならば、そして自分の子息重慶が太子に冊封されたならば、その王妃が追放されるはずがない。太子の母親を追放するような肝の大きい王と臣下がどこにしようか？ その前にあるのは重慶の太子冊封である。自分の子息が太子に冊封されたことに不満を持っただろうか？ そのはずがない。そうならば重慶は成貞王后の子息ではない。(12c)は自分の子息でない重慶が太子となったことに抗議したのである。

それでは成貞王后の子息は誰だろうか？この時期に登場した王子は重慶を除くと守忠だけである。守忠は704年婚姻した王妃の子息でもないし、聖徳王の子息でもない。守忠は孝昭王の子息である。それならば守忠の母親となり得る王妃は成貞王后である。正常ならば成貞王后は孝昭王の王妃である。(12c)は成貞王后が自分の子息守忠が唐に行っている間に、聖徳王と704年に婚姻した同壻（成貞王后の夫すなわち孝昭王の弟である聖徳王）の王妃の子息重慶が太子に冊封されたことを抗議して追放されたのである。重慶は成貞王后には母方の甥である。それで聖徳王は義理の姉を宮殿の外に追いやったのである。

今や王子金守忠と成貞王后の正体が正確に明らかになったのである。成貞王后は32代孝昭王の王妃であり、守忠は孝昭王と成貞王后の子息である。守忠は父親孝昭王が早く死亡しなかったなら、王となるべき第1候補だった。ところで父親が700年5月の「慶永の謀反」で傷を負い、702年26歳で昇遐した。ここに國人[父親の外祖母瑤石公主]が五臺山に行って、僧になっていた22歳の叔父を連れて来て即位させたが、この人が聖徳王である。聖徳王は慣例により成貞王后を兄死娶嫂（兄が死ぬと義妹を扶養する）したのであろう。

聖徳王は(13a)で見ると704年に初めての婚姻をした。ところでその王妃が成貞王后なのか嚴貞王后なのかは『三国史記』だけ見ては分らない。(12c)の「成貞*{他では嚴貞と言った}*王后」を「成貞=嚴貞」なのか「聖徳王の王妃を

A記録では成貞王后と言ったが、B記録では嚴貞王后と言った」という意味なのか正確に知ることができない。筆者は後者と見る。そして(13b)で見るように720年に金順元の娘と2番目の婚姻をした。ところで(13c)で見るようにその王妃は炤徳王妃である。

- (13)a. 704年[聖徳王 3年]夏5月に乘府令蘇判*{旧本では叛と言うが、今回訂正した}*金元泰の娘を入れて王妃とした[夏五月 納乘府令蘇判*{舊本作叛 今校正}* 金元泰之女爲妃].
- b. 720年[同19年] 3月伊瀆順元の娘を入れて王妃とした[三月納伊瀆順元之女爲王妃]. 6月王妃を冊立して王后となした [六月 冊王妃爲王后].
- c. 724年[同23年]冬12月に 一炤徳王妃が死亡した[冬十二月 一 炤徳王妃卒].
＜『三国史記』卷 第8「新羅本紀 第8」「聖徳王」

しかし『三国遺事』卷 第1「王曆」は聖徳王のこの2人の王妃について(14)のように記し、とても簡明にこの頃の事情が分かるようにしてくれる。

- (14) 第33聖徳王, 名は興光である[第三十三 聖徳王 名興光]. 本名は隆基である[本名 隆基]. 孝昭王の同腹の弟である[孝昭之母弟也]. 先妃は陪昭王后である[先妃陪昭王后]. 諡号は嚴貞である[諡嚴貞]. 元太阿干の娘である[元太阿干之女也]. 後妃は占勿王后である[後妃占勿王后]. 諡号は炤徳である[諡炤徳]. 順元角干の娘である[順元角干之女]. <『三国遺事』卷 第1「王曆」「聖徳王」>

『三国遺事』は正確に聖徳王の最初の王妃である金元太阿干の娘が活着ている時は陪昭王后で、死んでからは嚴貞王后だと記している。『三国遺事』を見なかったり、見たけれども信じなかったり、『三国史記』だけを見るなら、この簡明な事実をまったく理解出来なくなっている。さらに「成貞*{他では嚴貞と言った}*王后」という『三国史記』の不必要な註の記録は無用な混乱ばかり引き起こした。この註は『三国史記』の編纂者たちが、聖徳王の王妃は嚴貞王后となっているのが突然成貞王后が出て来るので、「あっ！ 他のところでは嚴貞王后としたのに」と付け足したものである。彼らも成貞王后と嚴貞王后についてよくわからなかった。

(14)には成貞王后が聖徳王の王后だという痕跡もない。誰が見ても、成貞王后は嚴貞王后と異なる人物だということが分かる。そうならば当然成貞王后は誰の王后かという疑問を持つことになり、きちんと考える人ならば、当然成貞王后は孝昭王の王妃だろうと推論することになっている。この場合は『三国遺

事』が『三国史記』よりも正確で信じられる史書なのである。

704年聖徳王は(13a)で見るように嚴貞王后と婚姻して長子元慶、2番目の重慶、3番目の承慶を生んだ。長子は早く亡くなった。聖徳王は兄の孝昭王の子息である甥の守忠と自分の子息重慶の中で誰を後継者とするか悩んだ。それで守忠を714年2月に唐に遣わした。そうしてから715年12月に自分の子息重慶を太子に冊封した。夫の死後王位を子息に昇進させることができず、夫の弟に奪われ、今やその後に地位も夫の妾のような同壻（夫すなわち孝昭王の弟すなわち聖徳王）の妃である嚴貞王后の子息に奪われた成貞王后は烈火のごとく抗議したであろう。

そして成貞王后は自分の意志か他人の意志か知らぬが、716年3月大宮を出た。慰謝料は充分に得たものとみえるが、2度にわたって天下を奪われた成貞王后としてはやりきれなかった。唐にいる子息守忠に知らせた。それで守忠が717年9月に帰国した。来てみると、太子重慶が717年6月死亡していた。子息を失った叔父、叔母に守忠に抗議する余地もなかった。今や再び太子に冊封されることを待たなければならなかった。しかし従弟承慶が頑張っていた。守忠は嚴貞王后の3番目の子息承慶と王位継承競争を繰り広げるしかなかった。

このようにして696年孝昭王20歳の時に守忠が生まれたということが証明された。守忠は神文王の長孫であり、文武王の長曾孫子である。神穆王后と瑤石公主側は守忠が王位継承権者とならなければならないと考えた。しかし元子嗣宗を推す慶永と順元は副君に冊封されている嗣宗が優先すると考えた。必然的に衝突するしかなかった。

700年5月の「慶永の謀反」は、この金守忠の出生によって王位継承の可能性がなくなった、683年5月7日正式に婚姻した神文王と神穆王后の最初の法的婚内子息の684年生まれ「神文王の元子嗣宗」側の抗議である。しかしこれは嗣宗が兄の孝昭王と王位を争った事件である。恐らく慶永は金嗣宗の義父であろう。684年生まれの嗣宗は700年に17歳である。婚姻した。その子息は733年父親を尋ねて唐に出かけた金志廉である。そして金順元は慈儀王后の弟として嗣宗を支持することによって瑤石公主と対立した。

「慶永の謀反」で神穆王后が死亡した。孝昭王も傷ついた。娘[神穆王后]を失った外祖母瑤石公主は怒った。瑤石公主は元子金嗣宗を副君から廃位させて、元子の資格も剥奪した。それがあの記録(6a, b)と(7a, b)である。金嗣宗は歴史から消された。朝廷では言及もできない逆賊となった。しかし嗣宗の出生年684年は元子の出生年であつたが消された。この謀反で慶永が死に、順元が中侍から罷免された。これが後に問題となる。

今や正統性を備えた王子は嗣宗の弟金欽質だけである。この時國人は金欽質を再び副君に冊封しようとしただろう。金欽質の出生年月である687年2月に「元

子生」が記録されたからである．ところが700年に17歳の兄嗣宗が副君から追放されて、元子の地位も剥奪される姿を守った14歳の欽質は副君となることを口を極めて辞退した．その状態で702年に26歳の孝昭王が昇遐した．國人は再び16歳の欽質を即位させようとした．しかし欽質は王位を捨てて逃げた．神文王と神穆王后が婚姻した後に生まれた王子はそれ以上いなかった．

やむなく國人は五臺山に行っていた22歳の孝明を連れて来て即位させた．この人が33代聖徳王である．しかし慈儀王后の実家の勢力を抑えた勢力はこの國人である．この時期には文武王の弟の愷元が上大等（国の政権の最上の官職）に着く等、瑤石公主の兄弟たちが強力な権力を握っていた．

これがこの記録「溟州五臺山寶叱徒Bosnae太子傳記」，「臺山五萬眞身」の裏面に入っている31代神文王，32代孝昭王，33代聖徳王の時期の新羅王室の歴史である．この記録は要約すれば(15)のような内容を持っている．

(15)a. 643年慈藏律師の五臺山入山[來到此山]と648年慈藏律師の太白山帰還[不果而還]

b. 慈藏律師が(五臺山から)帰り[藏師之返]，693年頃寶叱徒Bosnaeと孝明が五臺山に姿を消したこと[隱入]

c. 700年のsei-bər[新羅]で起こった「慶永の謀反」による702年の孝昭王の死亡[誅滅]

d. 國人[瑤石公主]が五臺山の孝明を sei-bər[國]にお連れして来て[歸]聖徳王として即位させたこと

<3> 高僧となった新羅の3人の王子と神文王の子息たち

孝昭王が年齢を『三国遺事』の(10b)によらず、現在の韓国史学界の通説通りにすれば、新羅中代王室の王子たちをめぐる重要なことをまったく説明できない．

その代表的なものとして挙げることのできるのが『宋高僧伝』に記録された新羅王子出身という3人の高僧である．地藏菩薩の化身として菩薩の班列に登った金喬覺，淨衆宗を創始した無相禪師，唐肅宗と「安史の亂」を鎮圧するための百高座講會を開いた釋無漏[煩惱がない]，このように3人がそれである．

しかし孝昭王の生年を『三国遺事』のように父母婚姻前の677年に生まれたものと認めれば、この3人の高僧についても鮮明に説明できる．ここでは簡略に示し、この主題はほかの文で論議することにする(徐禎穆(2016 予定)，「入唐求法僧喬覺[地藏]，無相，無漏の正体と出家の契機」，「西江人文論叢」47 輯参照)．

やはり神文王と神穆王后の婚前、婚外の3番目の子息孝明[本名：隆基，改名：興光]が王位に登った．これをもって神文王の元来の元子嗣宗，新しい元子欽質，

そして長孫守忠が王位継承権から追い出された。王位を捨て、実は奪われて唐に行って高僧になったという新羅の王子3人がこの中に全部入っているのである。

以後金守忠は714年唐に宿衛に行き、717年に帰ってくる(『三国史記』聖徳王の条参照)。そして行方をくらました。彼が719年24歳で唐に行き、金喬覺として修道し、金地蔵菩薩となった。75年修道し、99歳になった794年に入寂した。3年後彼の腐らない死体に弟子たちが金を着せて月身佛=等身仏を作った。その肉身仏が今も安徽省 Anhuisheng 池州市 Chizhoushi 青陽県 Qingyangxian 九華山 Jiuhuashan に安置されている。彼の99歳入寂を讃える99メートルの高さの銅像もそこに立っている。地藏菩薩金喬覺が孝昭王の王子金守忠であるに違いない。

687年2月生まれの子金欽質は726年40歳で唐に使臣として行き、唐の玄宗に郎將[唐正5品上]を受けた[授郎將還之](『三国史記』聖徳王条参照)。「還之」の目的地が不分明で、彼が新羅に帰ったのか帰らなかったのかは分からない。彼は今の寧夏回族自治区 Ningxia Huizu Zizhiqu 銀川 Yinchuan 賀蘭山 Helanshan 白草谷 Baicaogu で修道し、釋無漏となった。756年唐の肅宗の要請で「安史の乱」を鎮圧する百高座講會に参加した高僧がまさしくこの神文王の5番目の子息欽質である。彼は758年立ったまま足が地面から1尺ほど離れた状態で入寂した。唐の肅宗は彼の遺書に従って葬儀を手厚く行い、彼が修道した下院に安置した。

684年生まれの子金嗣宗は728年45歳の時唐に使臣として行った。唐の玄宗は果毅[唐從6品下]を与えた。彼は帰国しなかった。そして733年に子息志廉も呼んだ(『三国史記』聖徳王条参照)。彼は四川省 Sichuansheng 成都 Chengdu に「安史の乱」を避けて来た唐の玄宗の配慮で成都淨衆寺に駐錫し、淨衆宗を創始した。762年79歳で座ったまま入寂した。500羅漢の中で455番目の羅漢がまさしくこの無相禪師、神文王の4番目の子息、嫡統の元子金嗣宗である。

(15)に要約されるこの記録をよく読めば、当然聖徳王の即位が正統性の欠如した、太子に冊封されたことのない、婚前、婚外の出生王子の不法な王位継承だということを知ることができる。それではこのような無理な王位継承を推進した実際の勢力[國人]は誰なのだろうか？そしてこの不当な王位継承で王位を奪われた嫡統性を備えた王子たちはどうなったのだろうか？⁹⁾ 今やその気になる点はすべて解けたのである。

こうして婚前、婚外の3番目の子息で5兄弟の中で正当性の面で最も落ちる孝明が漁夫の利を得て王となった。彼は693年8月にすでに五臺山に出家し、僧侶となっていたが、702年に外祖母瑤石公主のおかげで仏の心理を捨てて還俗し、国[sei-bār]に帰り、王となったのである。だしぬけの幸福はこのように突拍子もなく突拍子もない方向に流れていくこととなる。しかし井戸端でスニョン(おこげ湯)を探すまねはするな(ふさわしくない場所で突拍子もない要求は

するな)という言葉がある。彼が705年に自分が修道した孝明庵に眞如院[上院寺は眞如院の上に建てた寺である]を建てたのである。

これをもって5番目の子息たちについての歴史的眞実がある程度明らかになった。まだ見方によっては明らかでない点もあるが、『三国遺事』を中心として『三国史記』の該当する時期の関連事項を要約して『宋高僧伝』の記録を考慮すれば、その時代の王子たちの事情が現在では疑問が生じない程度に簡明に整理されたものである。

それ故孝昭王が687年2月生まれの神文王の元子だとか、6歳で即位したとか、婚姻しなかったとか、16歳で昇遐したとか、幼い時に神穆王后が摂政となっただろうという新羅中代政治史の記述は全部間違ったものである。

そして『三国遺事』を信じない態度もみな間違ったものである。まだ筆者の勉強が浅く、その間どれほど多くの論著が『三国遺事』の重要な歴史記録を信じられない作り出した話だと蔑んだかしのれない。ただし次の2つは明らかに間違ったものであることを指摘しておく。

682年5月2日神文王が萬波息笛と黒玉帶を貰った。それを祝賀して5月16日6歳程度の太子理恭(=洪)[孝昭王]が月城から祇林寺の裏山含月山の龍淵瀑布に馬に乗って来た。孝昭王理恭が存在した事態は事実である。なぜならば彼は677年生まれだからである。萬波息笛や黒玉帶自体は文武王と金庾信を笠に着て681年8月の「金欽突の謀反」で離反した民心を收拾するための象徴操作であり得る。しかし今まで通用した、太子理恭が687年2月生まれなので、この682年の「萬波息笛」の記事の悝恭の出現は信ずることができず、従ってその「萬波息笛」の記事事態も信ずることができないといった主張は間違ったものである。進んで「萬波息笛」を、孝昭王の時の夫禮郎が狄賊に拉致された事件と関連付けて孝昭王代のことなのに神文王代に遡らせて記したという韓国史学界の主張は、まったく記録に土台を置かないものであり、「元子」と「元子理恭」を同一視した不注意な文献の読み方から出て来たもので、空想によって操作された明らかに間違ったものである。

また孝昭王が687年生まれのため692年神文王の葬儀の時のことを記した「惠通降龍」条の孝昭王の「王女」が「王母」の誤植だというのも間違ったものである。孝昭王はこの時16歳だから、赤ん坊の娘があり得るのである。

孝昭王が677年生まれだということを確定すれば、『三国遺事』の神文王、孝昭王の時のことはほとんどすべて事実に近い。資料批判の最も低級な水準は直さなければならないことは直せず、直してはならないことは直すのである。そして最も悪いのは完全な『三国遺事』の記事を誤読、誤訳と言って信ずることができないと言い、やはり研究資料として用いるなど言うのである。

<4> 整理

これが『三国遺事』のこの記録と『三国史記』の該当する年度の記録、そして『宋高僧傳』、『舊唐書』、『新唐書』、『資治通鑑』の記録に土台を置き、筆者が文献批評を経て現在まで到達した歴史的事実である。勿論筆者は現代の出家した『則天武后評伝』と小説『則天武后』等もみんな参照した。

その裏には唐に行った神文王の4番目の子息嗣宗と5番目の子息欽質、そして孝昭王の子息守忠の煩惱が入っている。彼らは神文王と神穆王后が引き起こした婚前、婚外の情事で生んだ最初の兄[嗣宗の場合]孝昭王、そして父親[守忠の場合]孝昭王によって王位の継承の候補者になってから心だけ傷つき、俗世の王位争奪戦に幻滅を感じてこの世に背を向けた。欽質の場合は自ら王位を兄に譲歩した痕跡が見えるが、嗣宗と守忠はそのような痕跡もなくほとんど王位を奪われたものと見られる。多く仏教界では真理の探究のために王位も惜しげもなく捨て、仏法に帰依し、高貴に生きたように糊塗するが、それは真実とは距離が遠い。彼らは俗世の王位争奪戦に巻き込まれ苦悩するうち敗北し、この地に生きることができず、他の世に行ったのである。そうでなかったならこの俗世で王子として享受する快樂を捨てるはずがない。

『三国遺事』は『三国史記』の王の統治行為中心の記事にはあらわれない、その記事の裏に入っている歴史の真実を記している。すなわち『三国遺事』には『三国史記』がいまだかつて記すことができないか、わざわざ落とした重要な諸事件を記している記事が多い。これらの記事を綿密に読んでよく解釈すれば、現在通用しているものとはかなり異なる新羅中代政治史の真実を明らかにできるであろう。

[4] 恵明王妃の父親眞宗

そのような意味で必ず直さなければならないものを直せずにいる事例を一つ挙げておく。『三国遺事』の記事は大丈夫なものも直そうとしながら、何故『三国史記』の記事の中で明らかに間違えているものは手も付けられないようにするのか訝しいことこの上ない。

(16b)は真におかしな記録である。孝成王は聖徳王と嚴貞王后の3番目の子息承慶である。彼が即位する時唐は朴氏の王妃を冊封下。ところでその朴氏の王妃についていかなる記録もなく信忠が中侍となった739年正月の後3箇月たって信忠の七寸(七親等)の姪の恵明が王妃となった。ところでこの記録はこの恵明が「伊飡順元の娘」と間違えて記している。恵明は順元の娘ではなく孫娘である。

この記録をそのまま信じて「孝成王が母方のおばと婚姻して父親の同嬪(姉妹の

夫どうしの関係) となった」というおかしい学説が韓国史学界の定説となっている。なぜならば(16a)で見るように、孝成王の父親聖徳王も「伊湊順元の娘」炤徳王后と婚姻したからである。

(16)a. 720年[聖徳王19年] 三月納伊湊順元之女爲王妃[3月伊湊順元の娘を入れて王妃とした]. <『三国史記』卷 第8「新羅本紀 第8」「聖徳王」>

b. 739年[孝成王3年] 三月納伊湊順元女惠明爲妃[3月伊湊順元の娘惠明を入れて王妃とした]. <『三国史記』卷 第9「新羅本紀 第9」「孝成王」>

このようになろうとすれば、孝成王は炤徳王后の実の子息でなければならず、惠明が順元の実の娘でなければならない。しかし孝成王は承慶は先妃嚴貞王后の実の子息であって後妃炤徳王后の実の子息ではない。炤徳王后は4年10箇月間王妃としていた。その間に景德王憲永、743年2月唐に使臣として行った景德王の弟、四炤夫人等3人の子供を産んだ。炤徳王后は絶対に景德王の兄承慶を生むことはできない。

承慶の兄は重慶である。重慶は炤徳王后が婚姻する前の717年に死亡したから、先妃嚴貞王后の子息に違いない。重慶を継いだ慶事という名の承慶も嚴貞王后の子息である。「孝成王の母炤徳王后」という記録は法的な母を記したものであって、生母を記したものではない。今まで法的な母、生母が新羅史の論議に登場したことはない。しかし政治勢力の形成は生母にしたがってなされる。先妃の子息と後妃の子息は政敵となるのが基本原理である。

ところで深刻なのは惠明王妃が金順元の娘ではないという事実である。720年に伊湊である金順元が739年にも伊湊だというのはおかしい。普通10年で伊湊から角干に官等が上がる。王妃の父親が19年も官等がそのままいたということは常識から外れる。金順元は700年「慶永の謀反」によって中侍を罷免された。その時50歳だったとするならば、720年には70歳ほどになる。そして739年には89歳ほどになる。惠明が15歳で婚姻したならば順元はその娘を何歳で生んでいなければならないか？ 74歳で生んでいなければならない。ある老人が74歳で娘を生んで王に出家させられるのか？ あり得ないことである。

解決策は一つである。惠明は順元の娘ではないのである。それでは「女」を「孫女(孫娘)」に直せばよいのだろうか？ しかしそのようにすれば、彼の官等が19年以上伊湊であることを説明できない。

これに加えてもっと深刻な問題がある。(17)で見るように、『三国遺事』は惠明王妃の父親を「眞宗角干」と記している。これに比して炤徳王后の父親は、(18)で見るように、「順元角干」と記している。

- (17) 第34孝成王[第三十四 孝成王]. 金氏である[金氏]. 名は承慶である[名承慶]. 父は聖徳王である[父聖徳王]. 母は炤徳太后である[母炤徳太后]. 王妃は恵明王后である[妃恵明王后]. 眞宗角干の娘である[眞宗角干之女也]. <『三国遺事』巻 第1「王暦」「孝成王」>
- (18) 第33聖徳王, 名は興光である[第三十三 聖徳王 名興光]. 本名は 隆基である[本名 隆基]. 孝昭王の同腹の弟である[孝昭之母弟也]. 先妃は陪昭王后である[先妃陪昭王后]. 諡号は嚴貞である[諡嚴貞]. 元大阿干の娘である[元大阿干之女也]. 後妃は占勿王后である[後妃占勿王后]. 諡号は炤徳である[諡炤徳]. 順元角干の娘である[順元角干之女]. <『三国遺事』巻 第1「王暦」「聖徳王」>

これ以上言葉は必要ない. 『三国史記』の(16b)の「順元」が誤謬なのである. それを「眞宗」と直さなければならない. それならば順元と眞宗は父子の関係である. 二人とも娘を王妃として入れる時には伊飡だったが, しまいに角干に官等が上がった. だから炤徳王后と恵明王后は姉妹の関係ではない. 炤徳王后は恵明王后に対して父方のおばであり, 恵明王后は炤徳王后に対して実家の姪[父側の姪]である.¹⁰⁾ 従って, 孝成王は母方のおばと婚姻したのではなく, 父と同壻[妻の姉妹の夫]となったのではない. ところですべての新羅中代史の研究は孝成王が母方のおばと婚姻したと間違っただけを記している. 外国の学者たちが見る前に早く直さなければならない.

[5] 文献批評は国語学の仕事

『三国遺事』を信ぜず, 『三国史記』の間違った文字までも直さずにいるのが現代国史学界の現実である. これらのこと, どんな文字が間違えて, どんな記録が事理にかなっていないから, 事理にかなうべく直すこれらのことを誰がするのか? あのめちゃくちゃな翻訳書をいちいち文法的に調べ, 正誤を判別して正しい翻訳を誰がするのか? 歴史の文献批評を誰がするのか?

先生は国語史と関連した文献が文献批評を髪の毛に溝を掘る如くなされた. これを学んだわれわれはその領域を拡大して, 先生が国語史の文献を文献批評する時備えられた厳正な姿勢でわれわれの先祖たちが残した文献全体を対象に文献批評をしなければならない.

文法を知らなければ文を分析できず, 文を分析できなければ正しい翻訳をすることができない. そして元子, 長子, 太宗文武王等の単語の意味を正確に知らなければ, その単語が誰を, 何を指すのか知ることができない. そして文献に用いられた言葉を知らなければ文献記録の正誤を客観的証拠に土台を置いて校正

し、正しく直すことができない。

証拠によって文献記録を校勘して正しく翻訳すること、その考証学は人文科学の華である。文献を綿密に読んで初めてできるこのことは国語学がしなければならないことである。言語学が洋の東西を問わず文献学(Philology)から出発したという事実を忘れてはならない。

筆者は『三国遺事』の郷歌が出てくる記事とその関連の歴史を 30 回ほど教えた。教えるためには百回ほど以上も読んだだろう。最初は大まかに読んで翻訳書を見て教えた。ところで何が何だか前後が合わないことがあまりに多かった。歳月が流れ、原典を読んで直接翻訳して教え始めた。そして過去に教えたことがみなインチキだったことを知った。その時までそのような学説が主流で通用していたのだが、後で分かったのはそれがみんな間違っただけのことである。鳥肌が立った。郷歌を教えた人ならばみなその鳥肌の意味が分かるはずである。

今新羅史学と古典詩歌学界は統一新羅の歴史と郷歌文学の内容について罪を犯している。研究者が真実を語れず、虚の歴史を教えて虚の文学作品の解説をすれば、それは犯罪行為である。その犯罪行為をここでとどまらせ、少しでも多く真実の方向に研究を引っ張っていく指針を与える責任が国語学界にある。

筆者は今再び大学院生たちとともに『三国遺事』を百回読むことを目標としている。このように文献を読むようにと教えを下さったこと、そしてそうできる能力を育ててくださったこと、それが安秉禧先生がわが学界に及ぼした最も大きな学問的影響だと言うべきである。

4. 公的生活の影響

これからは公的生活での厳格さについてお話ししよう。政府は 1991 年その間任意団体としてあった国語研究所を国立国語研究院として国家機関化した。国語研究所長だった安秉禧先生は当時初代文化部長官だった李御寧 Yi Eoryeong イ・オリョン先生とともにこの国家機関の出帆の産婆役を果たされた。そして初代院長に就任なさった。その時修好なっただけで本来の姿を現した旧ソ連、そして中国、北朝鮮等の同胞たちの朝鮮語使用の実態を鳥瞰しつつ言語政策を国家レベルで調節していくための措置を示す。任洪彬先生が語文規範研究部長を任せられ、筆者は語文実態研究部長として仕事をした。

1992 年夏休みのある日だった。先生はアメリカ同胞の朝鮮語使用とハングル学校支援法案樹立のための実態調査のために出張中だった。任先生と筆者はともに金浦 Gimpo キンポ空港に迎えに行った。ところが空港でお会いする瞬間、おかしなことに 2 週間程度の間大きく変わられたという感を抱いた。重要業

務報告をお聞きになって家族とお宅に向かわれた後で任先生は筆者を見て「ああ、たいへんなことになった。先生が健康でないことは間違いない」と言った。抱いた感じは同じだった。そしてその直後病院で検査を受けられ、何日か後で何事もないかのように出勤なさって執務された。

1992 年末先生は大学に復帰なさり、筆者はもう 2 年仕事をした後 1994 年 10 月大学に復帰した。先生も速く大学に復帰しなければならないと辞職願を提出して後任の院長の選任と残余業務整理に余念がなかった。任先生と筆者は心の中で石の塊のようなものがおさえつけているかのような圧迫感を感じながらそんなふうになんか国語研究院の勤務を終えた。先生の病をわれわれは早く気付いたが、そしてご家庭では恐らくご存知だったろうが、先生は表には知られずに闘病生活をなさった。

先生は筆者が西江大学に来る前から長い間西江大に出講していらっしゃった。冠岳のいろいろの重責が重なる頃から西江大への出講をお止めになり、先生が教えられた科目を筆者が引き受けなければならなくなった。先生が定年をお迎えになり、ある大学の大学院の科目を担当なさったとおっしゃるので、筆者も西江大学教育大学院の中世国語文法の講義を依頼した。各々 3-4 名ほどだった受講生を西江大の講義室に集めて教えた、先生の講義を見ることのできた最後の学期、時々講義の終わる時間にお迎えに行き嗅ぐことになったあの濃い葉の匂いはいまだに鼻に残るかのようであり、あの匂いから受けた胸の痛みと断腸の思いは今も生き生きと残っている。そして何学期か後にわれわれは入院の知らせを聞かなければならないのだった。

語文実態研究部は国語純化という名の各種の生活言語直し、海外同胞の韓国語普及、北朝鮮語等を担当した。その期間任洪彬[1 代]/朴良圭[2 代]先生が担当なさった語文規範研究部は言語規範再整備と「標準国語大辞典」編纂を担当した。この時先生の教えのもとに言語礼節、海外同胞朝鮮語使用実態研究、『標準国語大辞典』編纂準備等の仕事を身につけたことがその後筆者の研究活動に大きな資産となった。

出帆したばかりの国語研究院でもっとも力点を置いたことは「話法（言語礼節）標準化」だった。李御寧先生と院長先生が協議して推進したことで、日常生活で用いる言葉の標準を決めることだった。子供の言葉学びから書く言葉である家族、親戚と姻戚間の呼称語、指称語、慶弔時の挨拶言葉、家庭や社会、各種機関内での敬語法等について基準となるべき標準語形を定めた。使用の実態を把握し、あるいは望ましくない傾向があるなら正しい方向に引っ張っていく世論主導層を形成しようと言う計画だった。

最も大きな問題は家族どうしの呼称、指称が乱れたということだった。その当時テレビ・ドラマでは남편[男便] nampyeon ナンピョン（夫）を「아빠 abba ア

ッパ」(お父ちゃん), 「오빠 obba オッパ」(お兄さん [女から見て])」甚だしくは「형[兄] hyeong ヒョン」(兄さん)と呼び, 시아버지[嫗—] siabeoji シアボジ(舅)を「할아버지 halabeoji ハラボジ」(お爺さん)と, 「시누이의 남편[嫗—男便]sinuieui nampyeon シヌイエ・ナンピョン」(夫の姉妹(小姑)の夫)を「고모부[姑母夫] gomobu コモブ」(父親の姉妹の夫)と呼ぶのが一般的だった。『論語』の正名論に照らして見れば, 社会が乱れる始まりと言えるものだった。名前を正しく立てて初めて手足を置くべき場を知ることができるというこの正名論を「言語礼節標準化」の理論的根拠とし, 呼称, 指称語が乱れるなら, 言葉が本来の役割を果たせないという論旨を延べてこの仕事を推進していった。

『朝鮮日報』の紙面を通じて論議のテーマを提示し, 1 週間世論を取りまとめ, その結果を会議資料とし, 委員会で決定し, その会議の結果を整理して新聞に載せることが 2 週間を一つの単位として 1 年以上続いた。この委員会は年齢層も幅広く, 出身地域も均衡をもって作られていて, 比較的正しく, 委員会の論議の多く用いられる言葉を標準語として定めた。「처남의 덕[妻男一宅] cheonameui daeg チョナメ・テク」(妻の弟の妻), 「시누이 남편 [嫗—男便] sinui nampyeon シヌイ・ナンピョン」(夫の姉妹(小姑)の夫)をどう呼ぶのが正しいか? このような質問に答えを与えなければならなかった。委員会の論議の末「처남의 덕[妻男一宅] cheonameui daeg チョナメ・テク」(妻の弟の妻)は兄や弟の夫人を呼ぶように「아주머니 ajumeoni アジュモニ」と呼び, 「시누이 남편 sinui nampyeon シヌイ・ナンピョン」(夫の姉妹(小姑)の夫)は夫の兄を呼ぶように「아주버님 ajubeonim アジュボニム」と呼ぶことに定めた。この会議資料と新聞記事の文字一つ一つに至るまで先生の目の届かないところはなかった。1992 年にこれを『우리말의 예절 Uri maleui yejeol』(韓国語の礼節)として出版する時には校正を直接なされた。

2011 年に標準話法制定 20 周年になり, 再検討して手を加える委員会が出来た。その委員会を主管なさり, 20 年間の使用推移を見ると, ほとんどあの時定めた言葉で標準語形が座を占めていた。成功した言語浄化運動と評価できる。このことを主導なさった先生の終始一貫した実行力がなした成果である。20 余名近い委員から成るで最終決定なさる時の先生の慎重さと思慮深い論議はまさに討議の模範的事例と言うことができた。

国語研究院が当面する問題の中でもう一つは国語純化だった。無分別に用いている外国語, 難しい漢字語, 残っている日本語, 日本式漢字語*等に置き換わり得る朝鮮語を提示して各分野で正しい言葉が用いられるように国語研究院の権威をもって推進せよという輿論が矢の如くだった。

*【菅野注】恐らく인양 inyang イニャン[引揚], 입체 ibche イブチェ[立替], 할증 haljeung ハルチュン[割増]のように日本での訓読みを朝鮮

で音読みした擬似漢字語。これに類したもので中国に入ったものもある。日：取り消し torikeshi, 韓：취소 chwiso チュイソ, 漢：取消 qǔxiāo チュイシアオ; 日：場所 basho, 韓：장소 jangso チャンソ, 漢：場所 chǎngsuǒ チャンスオ。

高速道路の非常道路を指す「갓길 gasgil(緑の道)」が代表的なものだった。その時やたらに広く用いられる段階にあった英語の「shoulder」に対する日本語の翻訳語を朝鮮語の漢字の発音どおりに読む言葉を除いて、「갓길 gasgil(緑の道)」が座を占めることには先生の活動が大きな役割を担った。国語審議会で審議して確定した後で政府の公式用語として全部署が統一して「갓길 gasgil(緑の道)」を使うから、すぐ「노건[路肩]nogyeon ノギョン」, 「길어깨 gileoggae キロッケ(道+肩)」*のような言葉は消えた。アパートの名前が一時「한가람 Han'garam ハンガラム(漢江)」, 「상록수[常緑樹]Sangrogsu サンノクス」, 「달빛 Dalbich タルピッ(月光)」, 「은빛 Eunbich ウンピッ(銀色)」, 「별빛 Byeolbich ピョルピッ(星の光)」とつけられたのがその時である。一般的に「○○동[棟]dong ○○아파트アパートゥ(アパート)」と会社の名前を付けるのが慣行だったが、「会社名ダメ、難しい漢字語ダメ、外国語ダメ」を原則とした。うまくいっているところへ、今はこの原則は守るけれどもおかしいことに「래미안 Raemian レミアン, 자이 Xi ザイ, 프르지오 Peureujio プルジオ, 데시앙 Desiang テシアン」等として、国籍不明の言葉と意味も推し量れない名前が都市を覆っている。

*【菅野注】甚だしくは日本語由来의 노가다 nogada ノガダ<rokata ロカタ>さえ用いられた。

「갑상샘 gabsansaem カブサンセム」は「医学用語純化」の過程で出てきた単語だが、「갑상선 [甲状腺] gabsangseon カブサンソン」として使われていたものである。この「선(腺)seon ソン」の字が問題なのだが、これは日本人の作った漢字*で「몸 mom[肉] 에 e 있는 issneun 샘 saem[泉]モメ・インヌン・セム」(身にある泉)という意味で、「샘 saemセム」(泉)に替えようという意見が多かった。研究院の公式立場も「임파선(淋巴腺) impaseon インパソン」を「림프샘 rimpeusaem 림프세ム」, 「한선(汗腺) hanseon ハンソン」を「땀샘 ddamsaem 타ムセム」(汗+泉)にする等、他の「○○선 [腺] seon ソン」をみんな「○○샘 saemセム」に替える方向を提示した。ところが今も医学界では合意が見られず、また「선(腺)seon ソン」にしようという意見も侮れず起きている。

*【菅野注】江戸時代の日本の蘭学者の作った漢字「腺」は現在中国や台湾でも用いられ、辞書その他に登録されている(読み: xiàn)。

それ以外にも建設用語、法律用語、美術用語等各分野の難しい漢字語と日本語の痕跡等を易しい朝鮮語に替えることを一つ一つ先生の指導を受けつつすいし

んしたことは忘れられない記憶として残っている。去年の春から夏にずっと法務部では法制処で直してきた刑事訴訟法修正案を前に小委員会を作って審議した。そこに諮問委員として参加し、意見を分かち合ったのだが、今は易しい漢字語までもあまりに多く手を付けてむしろ理解しにくい法律になっているという感じを持った。法制処の実務陣がとても若い方々で、漢字語をたくさん固有語に替える傾向を見せている。しかし筆者は易しい漢字語は無理に直さないでそのまま置くようにと何度もブレーキをかけた。ちょうどわれわれの若い研究院たちの順かの意見に先生がブレーキをおかけになったように。

しかしそれが日本式漢字語だと言え、ブレーキをかけにくくなる。それで「기차[汽車] gicha キチャ」が中国では「automobile」で、われわれと日本では「train」である。「수표[手票] supyo スピョ」が中国と北朝鮮では「signature」で、われわれと日本では「cheque, check」である*。法律用語の漢字語の中に日本と異なり、中国と同じものがあるか？ それだけが倭色の用語ではない。日本と同じで中国と異なるものはみんな倭色である。われわれ、日本、中国がみんな同じでないものは倭色ではない。ところで実際にほとんどすべての用語が日本と同じで中国と異なる。いざとなったらみんな直さなければならない。無理するなかれ。大衆が難しく思う話にもならない조각 jogag チョガク(蛆却：軽微な犯罪行為をなかつたものとする事)のようなものでも速く直すようにと言いたい。ところがそれは直せないという。対案がないからである。

*【菅野注】日本では「小切手 kogitte」と言う。むしろ「수표[手票] supyo スピョ」は韓国の造語ではないか？

海外同胞の朝鮮語の普及は主として共産圏の同胞たちに標準語形を知らせる教育活動である。旧ソ連、中国の同胞たちの用いる言葉は昔の咸鏡道 Hamgyeongdo ハムギョンドまたは平安道 Pyeongando ピョンアンドの方言を基本としてその上に現代北朝鮮語が被さった状態である。ところで3-4世が朝鮮語が出来ないというのが問題である。政府や民間団体は共産圏の同胞たちの手伝いがしたいのだが、言葉が通じないのでどかしかった。それで各大学の教授たちと国語研究院所属の研究員たちが旧ソ連と中国の各地に出かけて同胞の教師たちを対象に標準語、朝鮮語の規範、文法、朝鮮語の歴史、言語礼節等を教え、また現地の先生たちをわが国に多く招請して教えることにした。

この任務を帯びて中央アジアに行ってきた後に、その時収集した同胞たちの移住過程、生活の現実、言語使用の実態、北朝鮮との関係、宗教的な問題等に関して長い報告書を書き、その最後に仮称「文化奉仕団」を創設してこの地域に朝鮮語を教え、韓国文化を知らせる人文学専攻の若者たちを政府の次元で兵役の義務の代りに派遣するのがよいという提案をした。わが中高等学校の時英語話者の先生たちが平和部隊としてたくさん来ていたのだが、それを考えたのであ

る。この平和部隊の中でついに韓国学をする方々がたまに出てきたのだが、その方々が教えた高校生の中で国史学をする学者たちがその方々と一生涯交友を重ねるのを見たのが印象深く、われわれも地域の専門家をあのような方法で育てなければならないという考えを持ったのである。先生はこの報告書を土台として文化部代表として、外交部、国防部、教育部等と合意した。わたくしはこれが今日の KOICA*に具体化したと考えるのだが、多分外交部と国情院等ですでにこのような機構の必要性を痛感していたし、国防部も協力したものとみえる。そうして対象地域も拡大して専攻分野も広がって今日国際社会で韓国が人類の生活向上に奉仕する国として跳躍するのこの機構が基礎となっているのを見る。ところでその若者たちが後にその地域の専門家となる可能性も大きいのである。このようなこともその時先生の教育部、文化部、国防部、国会等の人脈がなかったならば、もっと遅く推進されたものと思う。

*【菅野注】韓国国際協力団。日本の JICA（国際協力機構）に該当する。

先生が力説なさったことのうちの一つは統一に備えて言語政策の初版の問題をあらかじめ調節しておくことである。それは中国の延辺朝鮮族自治州 Yeonbyeon Joseonjog Jachiju (漢: 延辺朝鮮族自治州 Yanbian Chaoxianzu Zizhizhou) の語文規範を把握してそれを通じて北朝鮮の語文規範をあらかじめ整理し、統一後に起こるかも知れない語文生活上の混乱を未然に防ごうとする方向になされた。中国に行き、朝鮮語の学者たちに会い、間接的にあちら側の事情を知り、われわれの語文規範の問題点に手を付けて整備することに心血を注がれた。そうして旧ソ連と中国、日本の朝鮮語学者たちとの交流を推進し、彼らをわが国に招請して辞典編纂及び漢字と関連する学術会議等を開き、国内の若い学者たちと親交を深めるよう配慮なさった。

北朝鮮で用いる言葉も正確に把握していなければならない。時には言論に「문건 [文件] mungeon ムンコン (公文書) [서류 [書類] seoryu ソリュ]」、「수표 [手票] supyo スピョ (小切手) [서명 [署名] seomyeong ソミョン]」、「얼음 보숭이 eoleum bosungi オルムボスンイ」(アイスクリーム) 等が上れば、文化部、統一部等で何の言葉かと研究院に問い合わせて来た。即刻答弁のしづらい場合が大部分だった。多分先生も上層部からしょっちゅうこういう問い合わせが来たようだった。筆者は「얼음 보숭이 eoleum bosungi オルムボスンイ」(アイスクリーム) について先生に次のような用紙の書面報告をした。「「보숭이 bosungi 보スンイ」は黄海道 Hwanghaedo ファンヘドの方言で「콩고물 kong'gomul コンコムル」(黄な粉) です。彼らは「크림 keurim クリム」(クリーム) が粉であることを知っていました。アイスクリームを食べてみたならば、「얼음 보숭이 eoleum bosungi オルムボスンイ」とはしなかったでしょう。そこでは言葉直しをする学者たちはアイスクリームも食べたことのない人々です。「노견 [路肩] nogyeonノ

ギョン」を「길썬gilseopキルソプ」(道+衽[おくみ])と直したその人々は恐らく高速道路の「shoulder」を見たこともないでしょう。その後で「얼음보숭이eoleum bosungiオルムボスンイ」(アイスクリーム)は北朝鮮で新たに編纂した国語辞典から消えた。北朝鮮語の規範はわれわれと異なり、外来語가헝그리아Weng'geuria ウェングリア(형거리Heong'georiホンゴリ)(ハンガリー)のようなロシア式発音や뽀스카Bbolseukaポルスカ(폴란드Pollandeuポルランドゥ)(ポーランド), 체스코 Cheseukoチェスコ(체코Chekoチェコ)(チェコ), 슬로벤스코 Seullobenseuko スルロベンスコ(슬로바키아Seullobakiaスロロバキア)(スロヴァキア)等のように現地音の発音になっており、特異である。

筆者は今国語審議会の委員長をしていて、再びこれらの問題と格闘している。「블루투스 Beullutuseu プルルトゥス」(Bluetooth)をどうすべきか? こういうことが以前として問題となる。語源はスカンジナビア半島を統一したデンマーク王のあだ名が「青い歯」がったというところから来たものである。「周辺機器統合運動機能」なのだが、狭い所でだけ通じると言って「삼지 통신[—通信] ssamji tongsin サムジ・トンシン」(煙草入れ+通信)としようという意見もあった。しかしいろいろ考慮すると、「블루투스 Beullutuseu プルルトゥス」(ブルートゥース)とするしかない。国語研究院で仕事していたあの時は先生に報告すればほとんど正答が出てきたのだが、今はどこかに相談するところもない。

このように国語研究院で筆者が関与したことはみな先生の綿密な検討と正確な方向の提示、そして決定されたことに対しては断固たる実行力による実践で一貫していた。そしてこれらのことの結果報告書はみな先生の決済の過程を経て繊細に練られた。このようなことを学ぶ恩が、軍隊生活を除いてはずっと先生によってのみ生きてきた筆者に与えられる機会が別にあったはずはまったくない。それだけでなく公文書と起案書類は少しの隙さえあっても決済されなかった。すべての予算の執行は厳格に統制され、公金の支出は合理的根拠の上に最大限節約してなされた。このようなことを通してわたくしたちは公務の厳格さ、国庫使用の厳格さを学んだのである。

先生の文は簡潔、明瞭なことで定評がある。論文だけそうなのではない。実用文もみなそうである。先生に文の訓練を受けた記憶の始まりは 1985 年に遡る。日本の東京で学術振興財団の支援で国際コリア学会が開かれた。語文学分野東洋 3 国学者が学術討論会だった。韓国側から 8 人が参加した。筆者も行って疑問文について発表した。ところで帰国して学術振興財団に報告書を出さなければならなかった。報告書の草案を作成せよとの指示がその中で一番年の若い筆者に下った。10 日ほどの間のことを最大限詳しく書くのであった。その時はタイプライターが一般化していなかった時代だった。ボールペンで書いてガーデン・ホテルに行って先生にお見せした。先生は初めから赤いボールペンを持って

いらっしやった。それから筆者が書いた報告書をお直しになるのだった。その時は気分がおかしかった。筆者も肩書が名前もない学校の国語学の教授であり、学校のまずまずの文案はわたしの手を経ないと完成しないのだし、そして軍では部隊のすべての文書がわたしの手を経なければならなかったのに、なぜお直しになるのか何もおっしやらなかった。読んでみればみんな分かることだから。

それでもそれはたやすいことだった。1991年から1994年まで国語研究院で部長以下すべての研究員が書いた公式、非公式の文書は院長の赤い修正の指示を受けるのが日常化した。庶務課の職員たちは本当につらかっただろう。しかし国語学を専攻した研究員たちは日に日に赤字が減っていった。そしてみんななぜ院長がそこに手を入れられたのか知ることとなった。むごい文章の授業であり訓練だった。今も文章が長くなる時にはいつも「あの時先生がどこをどう消したっけ」と考える。そして書いた文章をまた読んでみたり直して見たりする習性が生じた。大きな恩である。

1978年1学期の間冠岳で学科長でいらっしやった先生のもとにいた助教としていた時は少しもおろそかにできない緊張の日々だった。学科の公金の使用は1銭の錯誤もなしに正確にしなければならなかったし、学生運動と関連する学生指導では厳正で細心に言葉に注意しなければならなかった。学科教授会は必ず必要でなければ開かなかったし、やむなく開かなければならなければ1週間前に招集して会議資料はあらかじめ配布しなければならなかったし、会議は短く終えるのが原則だった。このようなことは学科の運営や大学の運営の基本となるということを体得する時間だった。

2学期には先生が奎章閣室長をなさって学科長としては1学期だけそのもとにいたが、その時先生と引き続いて学科長を担当なさった白影鄭炳昱 Baegyeong Jeong Byeongug ペギョン・チョン・ピョンウク先生が見せてくださった慎重かつ細密な学科長の職務執行遂行の姿は、その後に筆者が大学で勤務する時にいろいろなことにぶつかった時にいつも先生たちならばどうなさただろうかと考えるようになった。大学で研究し教える方々、特に国文学科の先生たちはいつも鋭敏に緊張して文を書く生活をするので、その文章を書くのに少しでも妨げにならないように学科を運営しなければならないということも恐らくその教えの土台にあったのではないかと思われる。このような学科の運営方式は助教の職を経たいろいろの先輩と後輩たちが後に各大学に進出して教授職を遂行し、学科を運営するのに鏡となったであろう。

先生はご自分の先生と諸先輩に対して実に真心を尽くされた。われわれが見たのは一石、心岳先生に見せられた慎み敬うお気持ちと李基文、姜信沆、金完鎮、鄭然榮、李承旭、金烈圭 Gim Yeolgyu キム・ヨルギュ先生に見せられた友愛と義理である。この駱山 Nagsan ナクサン*七友世代の実務的なことはほとんど先生

がなされた。西江大に出講なさって休憩室で英文学科や史学科の先輩教授たちにお会いになると、まるで50年代に東崇洞で一緒に勉強した時代にお帰りになったかのように礼儀正しくお相手して談話をなされた。そのお忙しい中にも同期生たちの集まりも手ずからおまとめになったものと聞いている。先生は実に目上の方に対する慎み敬うお気持ちと何事にも真心を尽くす至誠のソンビ(士)でいらっしゃった。

*【菅野注】駱山 Nagsan ナクサンは駱駝山 Nagtasan ナクタサンの略。ソウル大学東崇洞の旧キャンパスが駱山の麓にあることから、東崇洞の旧キャンパスを意味する。

5. 結語

与えられたテーマが先生の学問と生活について公的、私的に経験したことを自由に回顧することでした。個人的にもっと近い方も多く、もっと永くそのもとに部下でいた方もいます。それでわたくしはわたくしが学んだ勉強と経験した公的生活だけを振り返ることにしました。どのみち狭い所見で先生の大きい学問をもっと語ることはできません。わたくしは特に吏読、口訣について勉強しなかったためにそこについて言うべきことはありません。後ろにあるその分野の文に任せます。あるいは真実と異なって歪曲された内容があるなら、お知らせくだされば直します。すでに10年たち、このような集まりを持っていることが慌てふためき目の前が曇るのをどうすることもできずにいます。謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げます。

(菅野裕臣訳)

【注】

*この文の2. 学問的縁と4. 公的生活は国立国語院の『새국어생활 Saegugeo-saenghwal (新国語生活)』第24巻第4号(2014)に載ったものを土台として再整理したものである。3. 文献を綿密に読むことの重要性はあちこちで発表した諸論文で論議されたものを核心の内容だけを要約して新たに書いたものである。この文は先生の10周忌追悼学術大会で基調講演として発表した文であり、創意ある論文ではなく回顧録である。

1) 「물시브리에 mur-si-βu-ri-yəi」は「汀理」を解説したもので、徐在克 Seo Jaegug ソ・ジェグク(1975)で提案されたものであるが、白斗鉉 Baeg Duhyeon ペク・トゥヒョン(1988)に従って慶尚北道地域の地名に使用される単語から見て受け入れた。徐在克(1975)で始めてこの行を「새부런 물시브리야학| sai-be-ren

mur-si-βu-ri-ya-hei」と解読した。金完鎮 Gim Wanjin キム・ワンジン(1980:224)にも紹介されている。白斗鉉(1988)は徐在克(1975)の解読を地名に残る痕跡を通じて論証したのである。

- 2) 「수문 나리 su-mun na-ri」は「逸鳥川理」を解読したもので、現代朝鮮語では「(물이) 숨은내」である。この解読は2015年2月11日の第49回口訣学会全国大会で発表した東國大学 Dong'gug トングクの鄭宇永 Jeong Uyeong チョン・ウヨン教授が下さった情報を受け入れたものである。この解読は李任壽 Yi Imsu イ・イムス(1992, 1998:216-218)で初めて提示されたが、そこでは現慶州市 Gyeongju 키ョンジュシ陽北面ヤンブンミョン Yangbugmyeon 冊(縦棒が2本だけ)千里 Ibchyeonri イプチョルリを指しているものと見ていた。イプチョルリが「스무내 seumunae スムネ」で、「二十乃里」として記された東京雑記もあり、水の流れが20本だという民間語源もあるが、実際には「石の下に水が隠れて流れる sumeunnae スムンネ隠れた川」を記したものと解釈した。元来筆者は「Geoncheon コンチョン(乾川)」を考えていた。水が流れない砂利地で、具体的な地名ではなく、そのような地名から代喩法によって使用された詩語と見たものである。ソウルの乾川は「mareunnae マルンネ(乾いた川)」である。
- 3) 蘇判のような官等を指す逆漁は迎鼓を管掌した官職から来た逆漁から逆漁となったものと見る。金熙萬 Gim Heuiman キム・ヒマン(2015)を参考とするよう望む。
- 4) 徐禎穆(2016a:241, 329)ではこの用法の「國」と中世国語「나라 narah」, そして日本の古都「nara(奈良)」を結び付けて論議した。ところでそこで述べた「国立寧樂博物館(National Nieraku Museum)」は筆者の記憶が間違っただった。1995年頃筆者は日本朝鮮学会に参席の折り天理に行き、奈良県を刊行する機会を得た。その時「国立寧樂博物館(National Nieraku Museum)」と書かれているのを見たと言っていたが、それがそうでないと菅野裕臣教授がこの文を翻訳する時に指摘してきた。国立博物館は奈良国立博物館(Nara National Museum)である。筆者がこれと国立博物館を混同したものと考えられる。「奈良」を昔「寧樂」と記したということが李基文 Yi Gimun イ・ギムン(1917)にあるのだが、この美術館がその昔の表記を生かして書いたものと見た。中世朝鮮語の「나라 narah」と現代日本の「奈良(Nara)」を直ちに比較することは難しい。末音 /ə g/ のためである。しかし「樂」の昔の音が「raku」と似ているならば、日本の古都「奈良」も末音 /ə g/ と関連づけ得る後行音を持ったこともあり得る。ここでは「나라 nara ナラ(くに)國」が都邑を意味し、わが言語「나라 narah」も新羅時代には都邑を意味し、日本は奈良も都邑を意味

するということを確認することで充分である。誤りを直し得る情報を下さった菅野裕臣教授に感謝申し上げる。

- 5) 初め記録を読むとき「元子」と「王子」を注意深く見られなかったようだ。「元子」は父が王で、母が元妃（王の正妃）である夫婦の間に生まれた長子である。長子でないか、婚外子、次妃、後宮の実子は王子にはなれない(徐禎穆(2015e)参照)。しかし王子は王の子息なら、みな王子である。この「元子」と「王子」の錯覚が些細なことのように見えることもある。そして「では他の人物としておこう」ということもある。しかしこれを直すや否や今の新羅中代史はすっかり崩れる。王室内部の事情もすっかり別の把握をしなければならない。すなわち、今存在する新羅中代史をすっかり捨て、新羅中代史を新たに書かなければならない。それほど今の新羅中代史は歴史的眞実と距離が遠い。
- 6) この「少女」について「小さい娘」、「末娘」、「幼い娘」と翻訳したのは誤訳である。金欽運の没年 655 年と関連付ければ神文王と婚姻した 683 年に 28 歳以上である。この「少」字が「之」字の誤りだろうという이영호(2003:70, 注 92)が正しい。「金欽運の娘」である。この「少」は「之」の誤刻であることは明白である。王妃は「○○ ○○之女」と表記するのが慣例である。『三国遺事』巻 第1「王暦」で「王妃は神穆王后金運公の娘である[妃神穆王后 金運公之女]」に「之」が用いられている。
- 7) 「その宅」がどの家なのか気になる。神文王は太子の時に東宮で暮らした。その時彼は金欽突の娘と暮らしたのだろうか、金欽運の娘と暮らしたのだろうか？ 理洪と寶川もともに暮らしたであろう。681 年生まれである孝明もここで生まれたであろう。それ故政明太子は金欽運の娘と暮らしたと見なければならぬ。ところで「その宅」は東宮とは見られない。あるいは神文王即位後東宮を空けて金欽運の娘は母の家に行き暮らしたのだろうか？ そうならば「その宅」は神穆王後の母親の家である瑤石宮だった可能性もある。
- 8) 朴魯埵 Bag Nojun パク・ノジュン(1982)等では聖徳王と成貞[=嚴貞]王后の子息と見たが、間違いである。そして国史編纂委員会(1998:96-101)等すべての論著で成貞王后が嚴貞王后の別名と見ているが、それも間違いである。徐禎穆(2014a:258, 270, 274 等)では「成貞王后と嚴貞王后が同じ人」となっている。間違いである。本人が検証しなかった通説に従ってはならないということを示してくれる。徐禎穆(2016a:268-272)で成貞王后と嚴貞王后が別の人だということを明らかにした。
- 9) 学問は好奇心から出発する。好奇心は気になる性分の別語である。このように謎だらけの記録に気になる性分を持たずにどのように好奇心が生じ得よう

か？ 筆者は読んで教えながら持つに至った気になる性分を解くための好奇心でこのことにしがみついただけである。誰かを批難したり、どれが間違っているということを論議するのが主たる目標ではない。ただ学問する基本姿勢を正すのが目標であり、それは文献の原文を校勘して正しい定本を確定し、それを正しく翻訳した後にそれに土台を置いて歴史的事実は校勘の結果が他の文献の発見で修正され得るから、後孫たちが引き続き補完していけるようにそのまま残しておかなければならないのである。

- ¹⁰⁾ 炤徳王後の父親順元は慈儀王後の弟である。慈儀王後の妹は雲明である。雲明の夫は金呉起である。金呉起の子息は金大問である。順元の子息眞宗、娘炤徳王后と慈儀王后の子息神文王、そして金呉起の子息金大問は従弟の間である。神文王と金大問は姨従四寸（母親の姉妹の子）である。眞宗と金大問は内従四寸（父親の姉妹の子）、炤徳王后と金大問は外従四寸（母親の兄弟の子）の間である。その次の代の神文王の子息たちは孝昭王、寶叱徒 Bosnae, 聖徳王, 嗣宗, 欽質である。眞宗の子息たちは忠信, 孝信であり、娘は恵明と見られる。大問の子息は信忠, 義忠と見られる。嗣宗の子息は志廉である。この志廉を『三国史記』は聖徳王の王姪と記している。この聖徳王の姪を忠信が唐の玄宗に対して「從姪[7寸(7親等)の姪]」と呼んでいる。このような計寸程度は言語の礼儀としては常識である。そして慶徳王は即位するや否やすでに死んでいる義忠の娘を王妃として入れる。その時中侍が信忠である。正確に王室をめぐる神文王の外戚、慈儀王後の実家の勢力が本当の姿を現した。このことから新たに研究されなければならない新羅中代の政治的事件がどれほど多いか筆者は見当をつけづらい。それでも誰でも文献を綿密に読むように忠告する。原典の文字をよく見てその文字のその時代の意味に合うように解釈し、漢文の文法、朝鮮語文法に従って直訳するように願います。漢字一つが千年たてば意味や字体がどれほど多く変わることか？ その漢字の意味は唐の漢字の意味でもなく、新羅の時のわが先祖が認識した意味でもなく、高麗の時の先祖が認識した意味でもない。インチキ翻訳書を大まかに読んで研究するならば、百発百中すべて間違いとなるのである。

参考文献

국사편찬위원회(1998), 『한국사 9』 「통일신라」, 탐구당.
권중달 옮김(2009), 『자치통감』 22, 도서출판 삼화.

- 김성규(2016), 「향가의 구성 형식에 대한 새로운 해석」, 『국어국문학』, 176호, 국어국문학회, 177-208.
- 김열규(1957), 「원가의 수목(栢) 상징」, 『국어국문학』 18호, 국어국문학회.
- 김열규, 정연찬, 이재선(1972), 『향가의 어문학적 연구』, 서강대 인문과학연구소.
- 김완진(1977), 「삼구육명에 대한 한 가설」, 『심악 이승녕 선생 고회기념 국어국문학논총』, 탑출판사.
- _____(1980), 『향가 해독법 연구』, 서울대 출판부.
- _____(2000), 『향가와 고려 가요』, 서울대 출판부.
- 김원중 옮김(2002), 『삼국유사』, 을유문화사.
- 김재식(블로그), <http://blog.naver.com/kjschina>
- 김종우(1971), 『향가문학론』, 연학사.
- 김종권 역(1975), 『삼국사기』, 대양서적.
- 김준영(1979), 『향가문학』 개정판, 형설출판사.
- 김태식(2011), 「‘모왕’으로서의 신라 신목태후」, 『신라사학보』 22호, 신라사학회.
- 김희만(2015), 「신라의 관등명 ‘잡간(찬)’에 대한 검토」, 『한국고대사탐구』 19집, 한국고대사탐구학회.
- 노덕현(2014), 정혜(正慧)의 세상 사는 이야기, 7. 무상선사: 사천 땅에서 동북아 불교 법맥을 지키다, 현대 불교 2014. 3. 28.
- 박노준(1982), 『신라 가요의 연구』, 열화당.
- 백두현(1988), 「영남 동부 지역의 속지명고-향가의 해독과 관련하여-」, 『어문학』 49집, 한국어문학회.
- 박정진(2011), 「박정진의 차맥, 23. 불교의 길, 차의 길 1. 한국 문화 영웅 해외수출 1호, 중무상선사」, 세계일보 2011. 10. 24.
- 박해현(2003), 『신라 중대 정치사 연구』, 국학자료원.
- 서재극(1975), 『신라 향가의 어휘 연구』, 계명대 출판부.
- 서정목(1987), 『국어 의문문 연구』, 탑출판사.
- _____(2013), 「모죽지랑가의 시대적 배경 재론」, 『한국고대사탐구』 15호, 한국고대사탐구학회.
- _____(2014a), 『향가 모죽지랑가 연구』, 서강학술총서 062, 서강대 출판부.
- _____(2014b), 「문말앞 형태소의 통사적 지위에 대하여」, 『서정목 선생 정년기념논총』, 역락, 23-62.
- _____(2014c), 「찬기파랑가의 단락 구성과 해독」, 『시학과 언어학』 27, 시학과언어학회.
- _____(2014d), 「찬기파랑가 해독의 검토」, 『서강인문논총』 40, 서강대

인문과학연구소. 327-377.

_____(2014e), 「효소왕의 출생 시기 관련 기록 검토」, 『진단학보』 122, 진단학회,

_____(2014f), 「그 분을 그리며, 내 기억 속 안병희 선생님」, 『새국어생활』 24-4, 국립국어원,

_____(2015a), 「『삼국유사』의 ‘정신왕’, ‘정신태자’에 대한 재해석」, 『한국고대사탐구』 19호, 한국고대사탐구학회.

_____(2015b), 「『원가』의 창작 배경과 효성왕의 정치적 처지」, 『시학과언어학』 30호, 시학과언어학회, 29-67.

_____(2015c), 「『삼국사기』의 ‘원자’의 용법과 신라 중대 왕자들」, 『한국고대사탐구』 21호, 한국고대사탐구학회, 121-238.

_____(2016a), 『요석』-「원가」에 대한 새로운 생각, 글누림, 698면.

_____(2016b), 「신라 제34대 효성왕의 계비 혜명왕비의 아버지에 관하여」, 『진단학보』 126호, 진단학회, 41-68.

_____(2016c), 「신라 제34대 효성왕의 생모에 관하여」, 『한국고대사탐구』 23호, 한국고대사탐구학회.

_____(2016d), 「국어학 연구회 현재와 미래」, 『어문학』 134, 한국어문학회, 285-34.

_____(2016e), 「입당 구법승 교각[地藏], 무상, 무투의 정체와 출기계기」, 『서강인문논총』 47, 서강대 인문과학연구소.

성호경(2008), 『신라 향가 연구』, 태학사.

신동하(1997), 「신라 오대산 신앙의 구조」, 『인문과학연구』 제5집, 동덕여대 인문과학연구소.

신종원(1987), 「신라 오대산 사적과 성덕왕의 즉위 배경」, 『최영희선생 화갑기념 한국사학논총』, 탐구당.

안병희(1959a), 「15세기 국어의 활용어간에 대한 형태론적 연구」, 『국어연구』 7, 국어연구회.

_____(1959b), 「중기어의 부정어 ‘아니’에 대하여」, 『국어국문학』 20, 국어국문학회.

_____(1961), 「주체겸양법의 접미사 ‘-습-’에 대하여」, 『진단학보』 22, 진단학회.

_____(1965a) 「후기중세국어의 의문법에 대하여」, 『학술지』 6, 건국대 학술연구원.

_____(1965b), 「15세기 국어 공손법의 한 연구」, 『국어국문학』 28, 국어국문학회.

_____(1965c), 『국어학개론』 (공저), 수도출판사.

- _____(1968a), 「중세국어의 속격어미 ‘-스’에 대하여」, 『이송년박사 송수기념논총』, 을유문화사.
- _____(1968b), 「국어 문장의 현대화에 대한 연구」, 『연구보고서』.
- _____(1982), 「중세국어 겸양법 연구에 대한 반성」, 『국어학』 11, 국어학회.
- _____(1987), 「국어사 자료로서의 ‘삼국유사」, 『‘삼국유사’의 종합적 검토』, 한국정신문화연구원.
- _____(1992), 『국어사 자료 연구』, 문학과지성사.
- 양주동(1942/1981), 『증정 고가연구』, 일조각.
- 양희철(1997), 『삼국유사 향가 연구』, 태학사.
- 여성구(1998), 「입당 구법승 무루의 생애와 사상」, 『선사와 고대』 제10호, 한국고대학회.
- 유창균(1994), 『향가비해』, 형설출판사.
- 이기동(1998), 「신라 성덕왕대의 정치와 사회-‘군자국’의 내부 사정」, 『역사학보』 160. 역사학회.
- 이기문(1961), 『국어사 개설』, 민중서관.
- _____(1970), 「신라어의 「福」(童)에 대하여」, 『국어국문학』 49-50 합병호, 국어국문학회.
- _____(1971), 「어원 수제」, 『해암 김형규 박사 송수기념 논총』, 일조각.
- _____(1972), 『개정 국어사 개설』, 민중서관.
- _____(1991), 『국어 어휘사 연구』, 동아출판사.
- _____(1998), 『신정판 국어사 개설』, 태학사.
- 이기백(1974), 「경덕왕과 단속사, 원가」, 『신라 정치사회사 연구』, 일조각.
- _____(1986), 「신라 골품체제하의 유교적 정치이념」, 『신라 사상사 연구』, 일조각.
- _____(1987), 「삼국유사 탐상편의 의의」, 『두계 이병도 선생 구순기념 사학논총』, 지식산업사.
- 이병도 역(1975), 『삼국유사』, 대양서적.
- 이병도, 김재원(1959/1977), 『한국사, 고대편』, 진단학회, 을유문화사.
- 이송녕(1955/1978), 「신라시대의 표기법체계에 관한 시론」, 『서울대 논문집』 2. 『국어학연구선서』 1, 탐출판사.
- _____(1961/1981), 『중세국어 문법』, 을유문화사.
- _____(1976), 「15세기 국어의 쌍형어 ‘있다’, ‘시다’의 발달에 대하여」, 『국어학』 4, 국어학회.
- 이영호(2003), 「신라의 왕권과 귀족사회」, 『신라문화』 22, 동국대 신라문화연구소.

- _____(2011), 「통일신라시대의 왕과 왕비」, 『신라사학보』 22, 신라사학회.
- 이임수(1992), 「‘창기파랑가’에 대한 새로운 접근」, 『동국논집』 11, 동국대 경주캠퍼스
- _____(1998), 『창기파랑가』, 『새로 읽는 향가문학』, 아시아문화사.
- 이재선 편저(1979), 『향가의 이해』, 삼성미술문화재단.
- 이재호 역(1993), 『삼국유사』, 광신출판사.
- 이종욱(1999), 『역주해, 화랑세기』, 소나무.
- 임홍빈(1976), 「존대, 겸양의 통사 절차에 대하여」, 『문법연구』 3호, 문법연구회.
- _____(1985), 「현대의 {-삽-}과 예사높임의 ‘-오’에 대하여」, 『국어학논총』 (선오당 김형기 선생 필질 기념), 창학사.
- 정 윤(2009), 「무상, 마조 선사의 발자취를 찾아서, 2. 사천성 성도 정중사지와 문수원」, 『법보 신문』 2009. 11. 09.
- 조범환(2010), 「신목태후」, 『서강인문논총』 제29집, 서강대 인문과학 연구소.
- _____(2011a), 「신라 중대 성덕왕대의 정치적 동향과 왕비의 교체」, 『신라사학보』 22집, 신라사학회.
- _____(2011b), 「왕비의 교체를 통해 본 효성왕대의 정치적 동향」, 『한국사연구』 154집, 한국사연구회.
- _____(2015), 「신라 중대 성덕왕의 왕위 계승 재고」, 『서강인문논총』 제43집, 서강대 인문과학연구소.
- 최명옥(1976), 「현대국어의 의문법 연구」, 『학술원논문집(인문사회과학편)』 제15집, 대한민국 학술원.
- 小倉進平(1929), 『郷歌及吏讀의 研究』, 京城帝國大學.